

ガレキに 花を咲かせ ましょう

ガレキから家々の建設への

過程の第一歩として

荒れ地を花畠にしました。

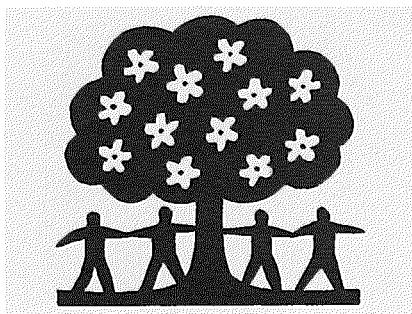
そこにはしっかり花が咲いて、

枯れました。

しかし、そのあとそこには

大きな希望が咲きました。

市民
まちづくり
ブックレット
No.4



天川佳美

ガレキに花を
咲かせましょう

目
次

- 1 はじめに 5
- 2 最初の呼びかけ文 7
- 3 ほんとうの花咲か爺さんはだれだったのでしょうか 9
- 4 第一回と第二回の種蒔き 16
- 5 芽が出た、花が咲いた 22

カラーフォトストーリー

-
- 希望の花
 - ガレキに花を・灘
 - ガレキに花を・長田
 - 倒壊・解体／再建・開店
 - 和田誠さんのお返事の手紙とマーク
 - 被災地に花を
 - はるかちやんのひまわり
 - 星空映画会

- 6 世界の和田誠さんへの厚かましいお願ひ 49
7 沖縄の緋寒桜／角田ナーセリーネットワークへの感謝 56
8 はるかちやんのひまわり／岡本交友会との出会い 60
9 一九九九年、夏 64
10 ちよつと、マスコミのこと 74
11 私達を助けてくれた、書き尽くせぬ心に残っていること 82
あとがき 93

1 はじめに

一九九五年三月、私達の事務所のある灘区楠丘町二丁目の周辺はすっかり空地が目立つようになりました。あの大揺れに搖れた阪神大震災の朝からほぼ二ヶ月。早くも楠丘周辺の人々は、無念にも壊れてしまつたわが家を涙を呑んで片付け、瓦・柱を撤去し、それぞれの復興の道を歩き始めました。

残された家の跡には、庭木や花の鉢がビニールの紐で一塊にされて、まるで留守番をするかのように置かれていました。でもその花や木々は凛として、花を咲かせる準備をし、やがていつか主人達が帰つて来るのを待つていますよ、と言つているように私には見えました。

倒壊した家々の解体のすすむ毎日、埃か春霞かわからぬ光景を見ながら、これから始まる長い長い復興の日々を思い、私は「まず、何から」と考えていました。

ガレキに花を咲かせましょう。

阪市街地緑花再生プロジェクト
第一段階 「ガレキに花を」 瓦礫の花畠化
第二段階 「家に苗木を」 敷地周辺の苗木（記念樹）植栽
第三段階 「まちに生垣を」 建物の生垣・庭づくり
第四段階 「都市に広場を」 まちの緑いっぱい花いっぱい

そしてその次は家を建て、会社を再建し、というキャッチフレーズを考えました。

その花の種はどうやって手に入れるの?このカチカチの土の上にどうやって種を蒔く?どうやって花を咲かせるの?と、そのひとつひとつを具体的に考えていきました。

いろいろなことがありました。

この『阪神市街地緑花再生プロジェクト』をここまで続けてきた理由のひとつは「希望と勇気」です。

それを、このブックレットにまとめることで私自身も振り返つてみました。
あの震災直後の夏の日々に咲いた「ガレキに花を」、私達ネットワークは決して忘ることはないでしょう。そしてそれに参加してくださった多くの人々の心に咲いた「ガレキに花を」、ずっと覚えていてほしいなあと思っています。



ガレキパパアとその仲間達／右から3人目が筆者

2 最初の呼びかけ文

一九九五年五月、こんな呼びかけ文を作つてみました。
これが第一案です。

ガレキに花を咲かせましょう

阪神市街地緑花再生プロジェクト1

まずは、ガレキから家々の建設への過程の第一歩として、この夏から秋に向けて荒地を花壇にしよう。咲くてはこりっぱな日々を備えて。

連続した生活を、連続した時間のなかで、復旧から復興にとりくむ。

- 第1段階 「ガレキに花を」 ガレキの花細化
- 第2段階 「家に苗木を」 废地周辺の苗木(記念樹)植栽
- 第3段階 「街に生垣を」 建物の生垣・庭づくり
- 第4段階 「都市に広場を」 まちの縁いっぱい花いっぱい

子供からお年寄りまで、自分たちの家の跡地に、みんなで種をまいて、芽のえた時に、葉がでた時に、花が咲いた時に、自分たちの街を見にこよう。

1地区当り500~1,000m²程度
経費は1m²当り100円程度 (1地区5万~10万円程度)
(種:50円/m²、土・肥料:100円/m²、工事費はけげん)
(100m²当りで土:1袋20kg、肥料:1/2袋10kg)
鉢、熊手、スコップ、バケツ、軍手などを用意

ガレキに花を咲かせましょう

ここにお住まいだった方、ごめんなさい。

ここにお住まいだった方、ごめんなさい。勝手にこの場所に花の種をまきました。ガレキが撤去され裸地になったところがこれから夏の番さやはこりっぱさをどうやってすごすのかと思うといったまれません。お家が建つまでの間にコスモスやヒマワリが花を咲かせるようにと、花咲じいさんや花咲ばあさんが勝手に花の種をまきました。秋までに家を建てられる方はそのままお建てください。

たくさん咲いたら摘み取って皆さんにお分けください。種が取れたらまたまいてください。そして、神戸が元の町に戻っても、この夏ガレキの中に咲いていた花を忘れないでいてください。

1995年5月
花咲じいさん、花咲ばあさんより

最初、私達“花咲か爺さん、花咲か婆さん”がまず思い描いたのは、空き地になつているところにゲリラ的に

勝手に種蒔きをする事でした。そこに

お住まいだった人や土地の所有者に声をかけて種を蒔くのではなく、ばあーと蒔いてしまつて、芽がでてきたころ「なんやこれは」と言つことになり、「実はこうなんです、勝手にごめんなさい」という風なイメージでした。

それで最初のお願い文の囲みのような看板を作ろうということも考えていましたが、種蒔き隊が空地調査をしたり、頭をつけあわせていろいろ策を練つた結果、おおむね住んでおられた方や地主の方に

声をかけられたことがわかりました。そして事前にお話しして種蒔くことができました。なかにはその土地のお隣の方が日常の管理を頼まれておられたところもあり、まったくゲリラで種蒔きをした場所は全域で二ヶ所だけでした。

このチラシは種蒔き隊も現場に持つて行き、もし種蒔きの時にこの活動に興味を持たれた方があれば呼びかけて皆さんにも配ることにしました。結果的にはこのチラシを配ることはなかったように思います。

ここで一つ、花咲か爺さんが震災百日目に書いた名文を紹介しましょう。

震災後百日がたつて、私達の事務局のある東神戸の街はぽつかりと空いてきました。瓦礫が徐々に撤去され空地にプレハブ小屋が目立ちます。もちろん焼け野原であった西神戸でも小さな仮設的な建物が建ちはじめています。

あの寒かつた日々に比べ、穏やかで汗ばむような春のよそいとなり、家々が撤去された跡の庭木のツツジが痛ましくもけなげに花をつけています。し

3 ほんとうの花咲か爺さんはだれだったのでしょうか

さて、一応の案はできたものの、「種はどうするか」。これがわりあい難問でした。神戸市内の比較的近くの園芸店に相談に行きました。「震災で空地になってしまったところへ花の種を蒔いて、家が建つまでの間しばらく花畠にできたらと考えています。一地区当たり五百〜一千平方メートル程度で一〇地区くらいは種を蒔きたいのです。どんなものがいいのかもわかりませんし、お金もあんまりありません。いいお知恵を貸していただけませんか」。

返事はなかなかきびしいもので、苦渋の顔でやんわりと断られました。大手の種苗業者に電話で相談もしました。だめならどこか相談できるところを教えてほしいともお願いしてみましたが、こんな都合のいい願いを「はいはい」と聞いてくださるほうが本当は無理なことだとわかるのに時間がかかりませんでした。

かし、樹々の若々しい新緑があまりに少なく、殺風景な街が続いています。これから暑い夏の日々を、このほこりっぽい街で迎えるのはたまりません。神戸・阪神間や淡路の皆さん、ガレキに花を咲かせませんか。一面のヒマワリやコスモスが瓦礫の街を、月見草や桔梗が焼け野原を埋め尽くす夢を見ています。子供達やお年寄りまでのみんなの力で、荒れ果てた跡地を耕し、種を蒔きませんか。

せめて家々の建設を始めるまでの間も、私達の美しい神戸のために。

一九九五年四月二七日（『復興市民まちづくり』第1巻「序・震災百日たった神戸から」小林郁雄）

さあ、いやがおうにも気分は盛り上がり上がっていました。

頭を抱えて、「」りや東京の世田谷の公園ワークショップの達人（玉川まちづくりハウス・伊藤雅春氏達）の登場やで」ということになりました。最初から聞けばよかつたものの、できれば地元の業者か園芸店でと考えたので少し遠回りになつたのです。それに地元でといつたところで、当時はそんなことどころではなかつたというのが実情ですが。

やつとのことで東京の第一園芸という大手造園材料業者に連絡がとれ、そこの関西支社の緑花システム事業部の北島義晃さんと児玉健治さんとおっしゃる二人が、わが仮設事務所にわざわざ来てくださいました。一九九五年五月一日です。なんと一ワープロでも出てこなかつた私達の最初の造語の「緑花」が同じではありませんか、と私は嬉しくなつた（変なことで感激するのです）のを

覚えていきます。

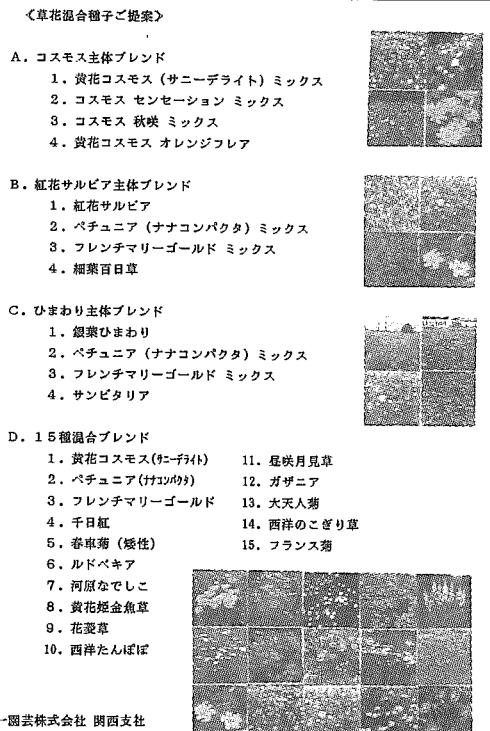
「荒れ地に種を蒔いて、水をやらなくて
も花が咲くという種がほしいのです。カン
パで貰いますがあんまりお金はありません」。何というものの頼み方でしよう、地元
の園芸業者の方々の反応で懲りてるはずだ
ったのに、すっかり興奮していて一気にそ
んな話から相談にはいりました。今から思
えは、なんとしてもこの活動をやりたかつ
たのだと思いますが、後々まで皆にいわれ
続けたまさに『天川の無謀その1』です。

第一園芸の北島さんも児玉さんも「わか
りました」と一言だったように思いますが、「本人は『い
いや』とおっしゃるかも知れません。

第一園芸さんから届いた種の種類は右下の図のように
四つのブレンドでした。

種蒔き隊がそれぞれの地区でそれぞれの希望を聞き、
この地区はヒマワリ、ここはコスモスと決めたのですが、
それを第一園芸さんに電話連絡をしましたところ、この

「草花混合種子提案」が届きました。我々は単にコスモ
スといったら秋口に風にゆらゆら揺れる可憐なピンクや
白の花と思い、ヒマワリといえば真夏の太陽に向かって
咲く大きな黄色い花としか思つてなかつたので、この案
の「ブレンド」には驚き、「そうか！広い場所にはこうい
う手を使うのか」と感心したのです（この感心も私だけ
だつたかもしません）。



各地区はA～Dの中から好きなブレンドを選び、何日
か後に色とりどりのどんなお花畠ができるのかと、夢を
ふくらませました。

当時、Bを選んだ地区はなく、今思うとちょっと残念
です。このBのブレンドもきっときれいな花畠になつた
ことでしょう。

種が用意できると、私達は種蒔き隊を結成しました。
もちろん支援ネットワークのメンバーやランチスケープ
の仲間の方に声をかけてもらい、たくさんの中員が集ま
りました。第一回の種蒔きは全部で一三ヶ所でした。

スタートは五月二七日土曜日、まずは灘区楠丘、私達
の事務所跡地からでした。野田北部まちづくり協議会会
長の浅山さん、魚崎小学校避難所対策本部長の高砂さん
をはじめ、人と自然の博物館の中瀬さん、藤本さん、姫
路短期大学学長（当時）小森先生ご夫妻、大阪市立大学
土井先生、ゼロックスの営業レディ（当時）堀川さん、
神戸市役所（水谷スクール一期生）の一岡さん、上山舞
に隼（我がスタッフの子供達）、ネットワークのメンバー
やランチスケープの仲間達約四〇名が我が社の解体跡地

に集合し、第一園芸の北島さんから説明を受け、児玉さ
んの指導のもとに練習を兼ねた最初の種蒔きをしました。
近所の住民の人達も、種蒔きをする空地にお住まいだつ
た人達も、何が始まるのかと日傘を差しての観戦です。
まず土と肥料とコンポストを混ぜ合わせ、そこにブレ
ンドした花の種を混ぜます。それをバケツに入れて一人
一人が堅くなつてしまつていい地面を五センチメートル
程耕した土地に広く、薄く、ばらまいて蒔くのです。鳥
が種を食べてしまわないよう、その上に土をかけてお
しまいです。

翌二八日日曜日は、長田区の鷹取、野田北部地区です。
大国公園にたくさん的人が集まりました。ここでも北島
さんと児玉さんが説明をしてくださり、焼け跡の堅い土
を耕し、種を蒔きました。

この鷹取地区ではおかしいことがありました。説明の
あと、土と種を混ぜ合わせたものをバケツに入れてそれ
ぞれ種を蒔く場所へもつて行つて蒔くのですが、見てい
ると説明どおりに蒔かないのです。「そうじやなくて、こん
なふうにしてとさつき説明があつたでしょ」といつても

まったく無視、何度も言つてもにこにこ笑つているけれど、

無視。「なんやねん、この人達は」と思った時、「ああ!」やつとのことで言葉が通じないことがわかりました。

そうなんです。この地域の周辺は韓国やフィリピン、ベトナムなどの外国の人々がたくさん住んでおられ、しかもこの地区にあるカトリック教会が彼らの拠点だったのです。

震災直後、言葉の通じない不安を抱えて彼らはコントラム基地（大國公園）です。彼らは日曜午前のミサを終えて、そのまま大國公園に残つて手伝つてくれたのでした。

言葉は通じませんでしたが、あくまで明るく、笑顔で黙々と土を耕し種を蒔きました。なんとも手慣れてうまいもんでした。

この地区的種蒔きには、まだまだよい話があります。

最初、広大な空地になってしまったこの地区は全面にヒマワリ畑にしようという案（この案でとてもないアイディアもありましたが、それは後の章で）でした。けれどあんまり土が堅いので全面耕すのは挫けてしまい、線で蒔こうということになりました。そしてこの時には

まだ決定はしていなかつた区画整理事業での道路計画予定線をヒマワリで描くことになりました。区画整理が決

まるころにはヒマワリの線で予定した道路が浮かび上がり、復興支援をかけてでいて、この道路計画も私案として提案されていた森崎輝行さんのアイディアでした。今、

区画整理で道路になつているところは、あの年の夏ヒマワリの道だつたところです。

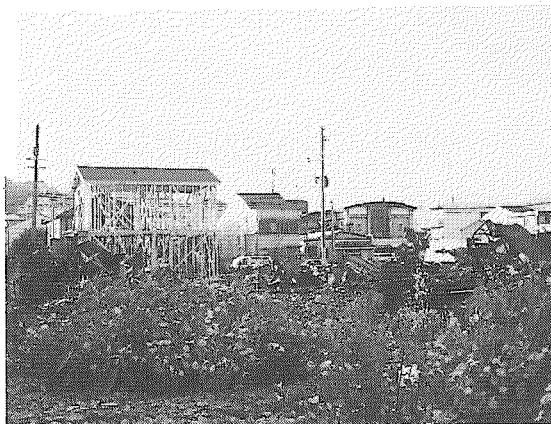


「この道はいつか往く道」ひまわりの道はこのころ、明日へ続く希望の道でした

ところで、この最初の種蒔きの時にあんまり土地が悲惨だったので、のままではひよつとして芽が出ないかもしれない、芽が出ないということは、当然花が咲かないということだと第一園芸のお二人は考えました。「こんなに一生懸命に耕し、種を蒔いたのに、もし花が咲かなかつたら住民はきっとがっかりする」というのが、二人の結論でした。

七月初め、私は最初の種を蒔いた一三ヶ所の発芽状況を見て回りました。カメラを持つて広い空地を花の芽を探して歩きました。バシャバシャとよく見ないでシャツを切りながら、地面ばかり眺め、「鷹取で、大道で蒔いたのは確かにヒマワリのはずなんやけどなあ」と思ひながら、しかし芽を出しているのはどうも違う、なんと花がすでに咲いているもあるやないの。地を這うようなピンクのペチュニアやないの。「おつかしいなあ」とすぐ第一園芸の児玉さんに「なんか、違う花が咲いているのですが、どうしたんでしょう、変なんです」と電話しました。なんと間の抜けた問い合わせたのでしょうか。

彼らは住民の人達ががっかりしないようにと、どんな



鮮やかなピンクで咲くペチュニアは驚きと感謝の花としていつまでも心に残っています（長田区大道地区）

条件でもほとんど必ず咲くというペチュニアの種をあの種蒔きのあと、蒔き足してくださつていたのです。その後も彼らは種を蒔いた場所へ何度も足を運んでくださつていました。私達はそれをまったく知りませんでした。ペチュニアの花が咲いて初めて知ったのです。

まいづた！彼らお二人こそほんとの「花咲か爺さん」だつたのでした。

そういうえば大道地区も硬い地面を耕せずにいると、ご近所の人が見るに見かねて削岩機を貸してくださいました。その削岩機で地面に穴をあけ、ヒマワリの種を一つぶ一つぶ丁寧に蒔いたのでした。

そして、真夏の暑い日差しの中でヒマワリは太陽に向かつて見事に咲きました。

こうして被災地の一三ヶ所で夏のような暑さの炎天下のそれぞれの一日は、各地域で笑い声が響き、あちこちに笑顔がこぼれ、それは震災直後から絶望を抱えてここまで歩いてきた同志達の希望に向かう一つのレクリエーションでもあつたように思います。

また住民の方々にとつてはたくさん悔しさや悲しみが染み込んでいる堅い堅い土を掘り起ことことは、ある意味ではつらい作業でもあつたはずです。けれど「いつまでも泣いてばかり居られへん、ほつといても殺風景なだけやから花が咲く方がええわ」「芽がでたら、毎日でも見にくるでえ」という元気な声は、逆に支援をする側の私達を励ます結果になりました。



大きな葉っぱの真ん中に確かな芽が力強く育っています（長田区野田北部）

鷹取地区で私がバシャバシャと写した日の写真の中に何とも胸の熱くなる一枚がありました。まだまだこのころは生活水にも困っていたころです。暑かつた夏の夕方、この女性は芽を出したばかりのヒマワリにやかんで水をやつてくださっているのです。泣けるやないですか。写真をとつたその日は気づいてなかつたのですが、現像をして始めてわかつたのです。思わず、ありがとうございました、と声に出して言いました。

家の跡にぽつんと供えられていた花よりも、具体的に種を蒔くことで住民も私達支援ネットワークも象徴的ではなく何かを始めるきっかけになつたような気がします。



ヤカンを手に芽を出したばかりのヒマワリの水やりをしてくださる女性（長田区野田北部 大国公園近く）

第一回と第二回の種蒔き

最初の年、一九九五年五月二七日土曜日を初日として、記念すべき第一回の種蒔きは神戸市内九ヶ所、芦屋市内四ヶ所の計一三ヶ所です。

初日、灘区の楠丘での種蒔きは各地区の代表の方々やネットワークのメンバーが、練習も兼ねた種蒔きをして技を習得し、その次の日からそれぞれの地区に出向いて地元の人々もお誘いして約二週間、せつせせつせと種蒔きをしました。

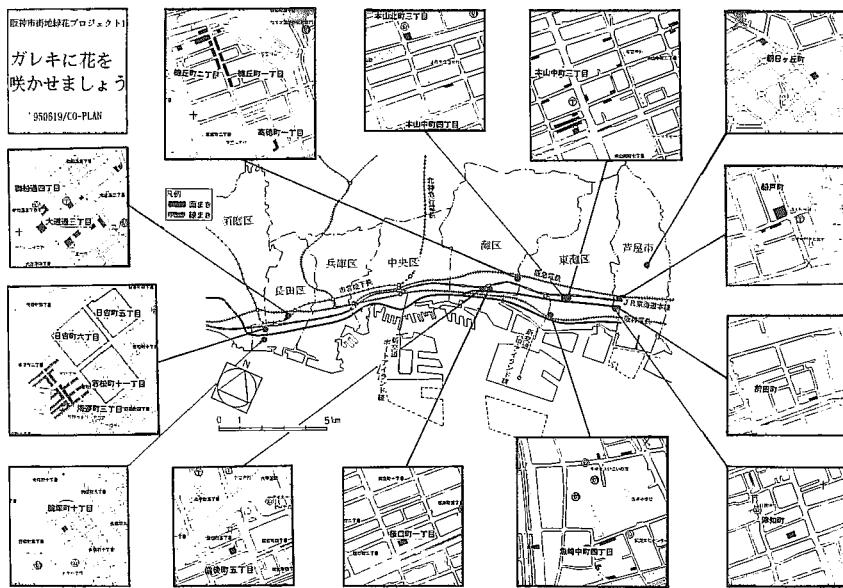
それぞれの地域の地元の方々は、たくさんのがれきの思い出や悔し涙を呑み込んだ瓦礫や焼土の堅い堅い土を耕し掘り起こし、肥料とコンポストと花の種を混ぜ合わせた土をバケツにいれて、ガレキの空地をあっちへ行つたり、こっちへ行つたり、額に汗して蒔きました。

「ここはもともと風呂やね、タイルの破片が残ってるよ」

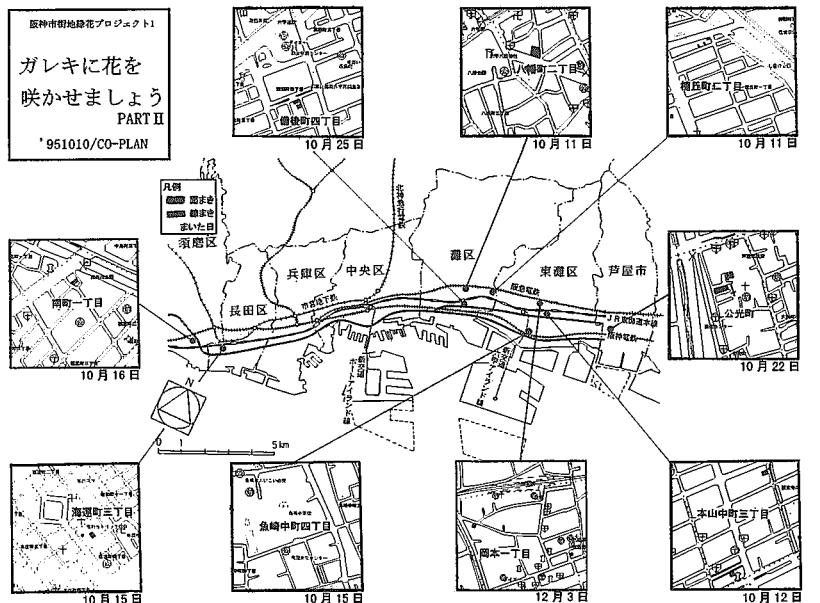
「ここは台所やわ、洗剤のボトルの残骸があるわ」「腹立つねえ、家なんか去年改装したばかりやのに潰れてしもうたんやわあ、しゃーないけど、腹立つわあ」と、心の痛みをぐつといらえて、にぎやかにスタートしました。でもキラリと光る瞳はもしかしたら涙だつたかもしだせん。

灘区の備後町、桜口町は「草花混合種子提案」の中のD、一五種混合ブレンドを選びました。

六甲道駅南の再開発地区（再開発したところが壊れ、もう一度再開発することになった）の西に隣接する備後町は神戸大学の平山さんと児玉さんが先導役で地域の女性達がたくさん参加してくださいました。華やかに笑い声が響き、やがて咲き乱れる、どうう花花が先に咲いたような一日でした。



第1回（1995春）の種をまいた場所



第2回（1995秋）の種をまいた場所

桜口町は倒壊を免れた建物の陰になつたような一角で、解体された建物の残骸ガレキが積んである横に、残された庭木のサツキが咲いていたのを覚えてます。近所の人と町の自治会の役員の人達で耕し、種を蒔きましたが、芽が出てすぐのころ発芽調査に伺うと、探しても探しても場所がわかりません。おかしいなあと思つたら、家が建つてました。ちょうど倒壊しなかつた建物に囲まれたような土地だつたので、建つてしまふとわからなかつたのです。ひよつとするところが種蒔きの後に建物が建つた一番乗りだつたのではないかと思います。

芦屋市前田町は国道二号線沿いの区画整理事業区域で、道路の両面、北側も南側も倒壊がひどい場所のひとつです。ハナヤ勘兵衛（本名は桑田）さんはいうカメラ屋さんは、昭和三年からの前田町に家と店舗を持つておられました。店舗は震災後公光町に一時避難され商売を続けて来られました。

ある日桑田さんから「区画整理にかかって家建てられへんねん、困つとんねんけど何かええ方法ないやろか」と相談がありました。ちょうど花の種を蒔こうという時

か爺さんである小林が「区画整理事業の区域内でも木造二階建は建てられるし、事業決定した時に移転補償もできる」と説明し、「建ててしまい」と言いました。桑田さんは喜んで種蒔きに参加してくださり、その後まるでもともとあつたように木造二階建の山小屋風店舗を建てられました。事業決定して換地が同じ場所ですめば、増築してそのまま三階建になるそうです。店舗が建つた時、私達は当然移動式生垣（木の箱に生垣となる中木を植えたもの）をプレゼントしました。

同じく芦屋市の船戸町、朝日が丘町、公光町での種蒔きは暑い日でした。この種蒔きは悲しい話をしなければなりません。

震災直後、芦屋での復興活動は『AAネットワーク』といつて個性豊かな建築家の人们を中心にネットワークが結成されておりました。

そのなかに高橋裕嗣さんという建築写真を撮る仕事をしておられる人がおられました。温厚な彼の人柄抜きにAAネットワークのまとまりはなかつたでしよう。

震災前から『港まち神戸を愛する会』という神戸の旧居留地周辺の近代洋風建築の保存運動をしてきた仲間（副会長だった）の一人で芦屋市朝日が丘町在住でした。震災直後の活動にも精力的に参加してこられ、もちろん種蒔きも先頭に立つて地域の人々を誘つてくださいました。その後のガレキTシャツに関係する活動にも率先して参加し、Tシャツを売つてくださつたり、知り合いの方々に声をかけてくださいました。

九六年の五月、身体の不調（病名は詳しくはわかりませんが）で入院され、その年の七月一〇日帰らぬ人となりました。九五年秋の二回目の種蒔きの後、我が社のサロンでお茶を飲みながら、「今年はどんな花畑ができるかたのしみやねえ」というひとときが最後でした。次にお会いした時にはすでに元気な姿ではなく、ベットの上で「高橋さん」という呼びかけにも、握った手にも反応はありませんでした。病院へ見舞つた帰り阪神電車のなかで沿線の倒壊した家々を眺めながら涙が止まらないを、昨日のことのように思い出します。なぜもつと早い時期に病院へお見舞いに行かなかつたの

でしたので「とりあえず種を蒔こうよ」と誘つて、花咲かと仲間にも言わましたが、最初入院されていると伺つた時はそんな大事だとは思わずにはいましたし、すぐに退院されましたので、その後の再入院のことも日常の業務に追われてしまつていたことが悔やまれました。家族の方からの「多分もうだめなので一度見舞つてやつてください」というお電話にびっくりしたのと、今まで伺わなかつたことが悔やまれましたが、もういくら悔やんでも仕方ありませんでした。

お葬式の日にAAネットワークの仲間だつた方が「高橋さんが咲かせたコスモスよ」と昨年のこぼれ種で咲き始めたコスモスを花束にしてもつて来られ、柩のなかに入れてくださいました。そして彼が楽しみにしていた「今年の花畑」はその日から一週間後にポピーの満開を迎えました。ゆらゆらと風に揺れるポピーを泣きながら見つめた日のことを、私はきっといつまでも忘れません。

高橋さん、いつも一生懸命だったあなたを私は仲間は誇りに思います。たくさんの笑顔をありがとう、たくさんの思い出をありがとうございます。

まだ高橋さんへの言葉は、今の私にはこれ以上書くこと

とができません。

第二回目の種蒔きは、翌年の春の花畠に向けて一九九五年一〇月と一二月に行われました。神戸市内と芦屋市内に九ヶ所です。長田区での種蒔き場所として一回目の時には御船通・大道通、日吉町・若松町・海運町、腕塚町の三ヶ所が参加されましたが、二回目は海運町だけになりました。その海運町でも、鷹取東第一地区区画整理事業計画決定の総覧が九月の中頃から始まりました。

当時、種を蒔いても事業が着手されブルドーザーが地面を掘り返してしまふとせつかく蒔いた種が発芽できなくなってしまうと、地元の人達は場所選びに一生懸命でした。春になつてわざかでも花が咲くようにと、鷹取力トリック教会の東隣りにできていた神戸市の現地事務所の陰のようになつた場所に、大きな円を描いて春の花の種を蒔きました。その日、種を蒔いた隣の敷地には換地の決まつた家が道路もはつきりしない中に落ち着かない様子で建ちはじめていたのを印象深く覚えていました。

灘区では阪急六甲駅の近く八幡町が二回目に新しい種蒔き場所として加わりました。東京で私達と同じコンサ

いが聞こえてきそうな思いを噛み締めながらわざかな土を耕して種を蒔いたこと、その小路に沿つて可憐な花が帶状に咲いた日のことをなつかしく思い出しました。

いすれも『きんもくせい』の第一〇号の表紙に書いたように、

“瓦礫から家々の建設への過程の第一歩として、芽が出て蕾がつき、花が咲くのをそこに住んでおられた方々が時々訪ねてくださるように”
の言葉どおりです。みんなにかわいがつて育てていただいた花は、その場所の人々の希望の花だつたと思つています。

せつかく種を蒔いたのにと言つてくださる方もありました。あまりに急なブルドーザーだと怒られた方もありました。でも私達は最初の思いどおり家や建物が建つことを喜ぼうと思いました。私は今回この本をまとめるにあたつて種を蒔いた場所をすべて歩いてみました。ほとんどが再建され、写真を写すことさえ困難なぐらい建物が建つてますが、なかには当時のままだつたり、その後三年間手がつけられずにあつたため、草が生い茂っています。



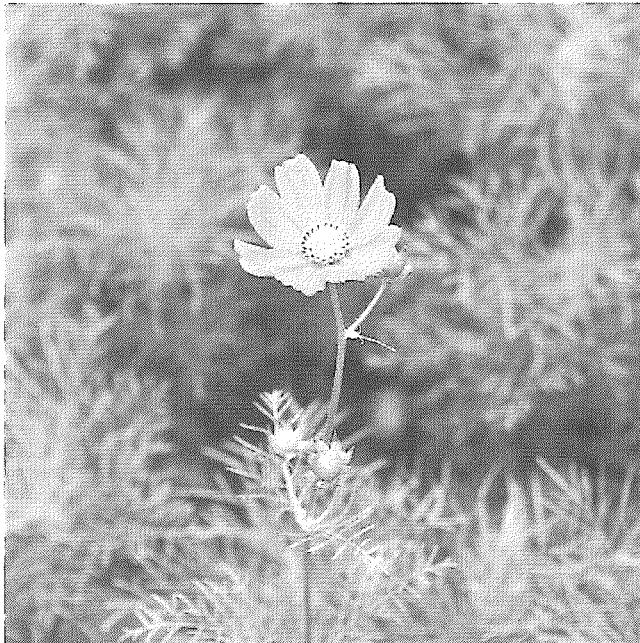
芦屋市公光町でコスモスの種を蒔く故高橋さん。何人もの人達で種蒔きをしたのに、なぜかこの写真には高橋さんしか写っていません

ルタントをしておられる水口さんのお兄さんの土地で、しばらくは何も建てないだらうということで借りれるようになりました。ここでは一般の方々から種蒔き隊に参加をしたいとの申し出がありました。一回目の教訓をいさかし、水やりや芽が出てからの世話がしやすいようにと、まず敷地の中に大きなクロスの道をつくり、瓦礫を耕しました。今となつては笑い話ですが、翌年の春先にやつと大きな蕾が膨らんで「明日咲くね」という日にブルドーザーが入り、マンションの販売展示場になつてしましました。近くの住民の方々ができるだけ切り取つて、それぞれのお家で咲かせてくださつたという後日談は、この近くにある親しい花屋さんから伺うことができました。

東灘区の本山中町二丁目の小路市場の跡地は一回目も二回目も地元の方のご協力で種蒔きをしました。ここも二回目の種の発芽を待たずしてマンションの再建が始まっています。大きな敷地に囲いがされました。思えばあの暑いくらいの五月、市場の通路の石畳が残つており、かつての賑わ

いる所もありました。このことはまた別の章でも触れることがありますので、ここでは私の心がきゅんと締め付けられたことだけに止めて置きます。

5 芽が出た、花が咲いた



なんと凜々しく清々しいことでしょう。楠丘のコスモスは六月上旬に芽がでて、七月二十五日に初めての花が咲きました。私達はこの花を“希望の花”と呼びました。それから約三ヶ月コスモスは咲き続け多くの人々に希望をもたらしました。梅雨の間はか細い茎が雨に打たれて折れないかと心配し、夏が来ると炎天下に枯れてしまわなかと水をまくのに苦労しました。この地域は倒壊がひどい地区で水道もガスも復旧が随分遅れました。そのために空地になってしまった場所の道路の一角に神戸市の水道局が蛇口を作つてくださいり、地域の人がみんなで使える

ようになっていました。我が社の隣の印刷屋さんもコンテナハウスを設置して仮の住まいと仕事場にしておられ、私達も倒壊を免れたコンクリート三階建の方で八人がひしめきあつて仕事場にしていました。水やガスのない毎日を送っていましたが、この水道のお陰で随分助かりました。水やりにもこれを使わせていただきたのは違法かも知れませんが、すでに時効ですよね。

この場所は住宅地の中で大きな道路からはひとつ中に入っていますので、本来は通りからはわかりにくいのです。しかし震災後はからーんと空地が拡がり、夏の暑い日差しを遮るものもないのですが、たくさん的人がわざわざここを通つて目的地への道とされました。コンクリートの仕事場の窓から道行く人を眺めていると、この場所で立ち止まり、汗をふきながらぼおーと一息つかれたり、買物の袋を道に降ろしてコスモスを眺めておられる姿を何度もお見かけしました。そんな時はハサミを手に出て行つて「どうぞコスモス持って行ってください」と声をかけました。「まああいいんですか、きれいですね、これを見せてもらえるからここを通るのが楽しみなんで

す。ありがとうございます」。わたしは何と答えていいのか、笑顔でいるだけが精一杯で声になりませんでした。また夕方、自転車を止めてコスマスを黙つてじつと見ておられる男性もおられました。おそるおそる「よかつたら切りますからどうぞ持つて行ってください」といいますと、につこりして「ありがとうございます」。自転車の後ろの荷台に花束をくくつてうれしそうに帰つて行かれました。その男性は二、三日後にまた自転車で来られ、「私はクリーニング屋をしてるものです。先日はありがとうございました。近所のおばあちゃんがほしいというんで、またもらつていいですか」と言われ、また自転車の荷台にくぐりつけて笑顔で行かれました。ズーと後になつて花畠に今の建物が再建されてからこの人が来られました。自転車を押して、何かを探すように。「何かお探しですか」と聞きますと「この辺りにコスマスの大きな花畠になつてる所があつたんですが、御存じないですか」と。うれしかつたことのひとつです。こんなことは、ここだけでなく、花の咲いた各地でたぶんいっぱいあつたことと思います。

感激しました。

一回目の種蒔きの時、芦屋市朝日が丘町のこのお家だけお断りできなかつた場所です。ゲリラで耕し、種を蒔きました（天川の無謀その2）。夏のある日、避難先の大坂からなつかしいご自身の家の跡地に立ち寄られ、どんな思いでこのコスモスの花をご覧になつたのか、一通のお便りがそれを教えてくれました（下部添付）。

芽が出て蕾がつき、花が咲くのを、そこに住んでおられた方々が時々訪ねてくださるようになればと願っています。

『きんちくせい』第一〇号
「ガレキに花を咲かせましょう」

まさにこのとおりになりました。そして、この方は今、この場所にお住まいです。

反響といえば、こんなことがありました。

九五年一月にこの「ガレキに花を」の活動資金としてHAR基金の第一回助成をうけました。HAR基金と

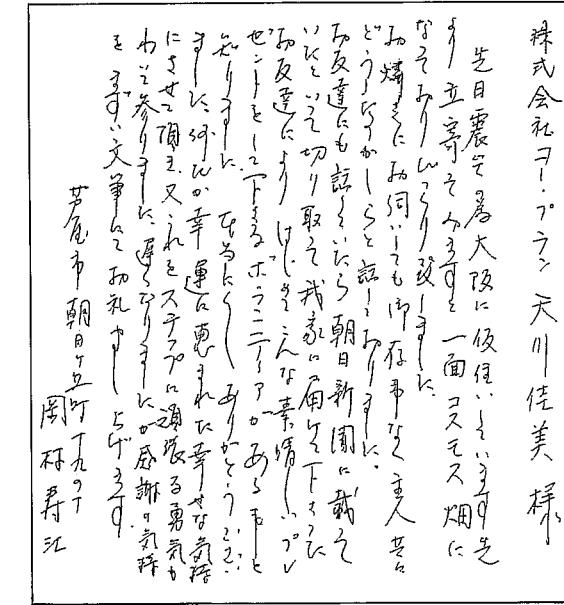
の中に「ガレキに花を」の呼びかけ文が使われました。全国町並みゼミで久しぶりにNHKの永井多恵子さんにお会いしました。HAR基金のパンフレットを渡し、こんなことをやっていますとお話しして、よろしくとお願いしました。その後震災一年目ということで一月十九日に永井さんが朝のニュース番組に取り上げてくださいり、その日だけでも二〇件以上の問い合わせをいただきました。

募金の問い合わせだけではなく、「ガレキに花を」への問い合わせもたくさんありました。中にはご自分の庭に木を植えてくださるという申し出もありました。緑花再生プロジェクトの第一段階の種蒔きのあと第二、第三の「木」に移行していくお家を建てられるようになつたら「思い出の木」を植えましようーと進むつもりでした。その活動はもはや私達素人だけではとても無理で、ランドスケープの専門家の登場が必要でした。漠然とした案として私が書いたものを読み返してみると、

全国の緑花に関わりのある業界の方々や自治体にお願いして、苗木を育ててほしいという呼びかけを

しそうと考へています。
五年もたつと苗木が成長します。それをたとえば子供達が一本ずつ持つて、神戸を訪ねてくださいませんかと呼びかけたいと思つていています。
というようなことを九五年の一〇月ごろに、日本造園コンサルタント協会関西支部発行の『ランドスケープ関西』三六号という冊子でインタビューに答えていました。
このころはまだ頭の中に漠然とあるだけで具体的に考へていた訳ではなかつたのです。家を建てられる人に記念に一本プレゼントして、そのかわりもう一本以上をその家庭や周りにご自身で植えてください。というように呼びかけて、街の緑を増やしていきたいと思つていたのです。

また、生垣を勧めるのに「生垣助成という制度があります」とか、植木屋さんのリストをお教えするといったことも、このころ考へてみました。生垣助成のお手伝いはその二年後に実際にやりました。移動式生垣という素晴らしい発明も造園業界の専門家（桑原章さん）の発案で実行し、神戸市内に今もたくさん設置されています。



芦屋からの手紙

これらはいずれにしても、「ガレキに花を」から発展

し、やがてランドスケープ復興支援会議／阪神グリーンネットへと育つていきました。

そしてこの一年後に安藤忠雄さん達の『ひょうごグリーンネット』が発足しました。いろいろな方が取材をしてくださいました。

建築雑誌

11
1997
Vol. 112
No. 1414

兵庫県南部地震その後

ガレキに花を咲かせましょう

天川佳美 まちづくりコーディネーター/阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

阪神大震災が一瞬にして多くの人々の命と住まいを崩壊してしまってからは、はや900日余りが経ちました。

水やガスのない不自由な生活がしばらくその中で、命をとりとめた人々は助けあって生きることを改めて知りました。食・物を分け、手を貸して送った日々を、私たち被災者は決して忘れることはないと思っていますが、2年半の月日は我がまちのガレキ跡の風景を一気にプレハブ住宅群のニュータウンへと変えてしまいました。

「ガレキに花を咲かせましょう」

ここにお住まいだった方、ごめんなさい。駆手にこの場所に花の種をまきました。ガレキが撤去され桜地になったところがこれから豆の蔓さやはこりぼさをどうやってすごすのかと思うといたまられません。お家が途方に因るコスモスやヒマワリが花を咲かせるようにと、勝手に花の種をまきました。秋までお家を建てられる方にはそのままお建てください。たくさん咲いたら摘み取って皆さんにお分けください。

種が取れたらまたまいにちください。そして、神戸が元の町に戻っても、この夏ガレキの中に咲いていた花を忘れないでください。 1995年5月

この文章がもとになって「ガレキに花を」は始まりました。

建物がすっかり撤去された夕焼けの跡地にボンと立って、愛しい我が家を懷かしむような後ろ姿を何人も見かけました。すっかり空き地になってしまった我が家がわたりでも、植木や鉢植の花をひとまとめにして残してあったり、ここで無残にも亡くなられたであろう人を偲んで供えられた花束が枯れかけているのを



写真1 植まさみ隊: コーブラン跡地周辺
(1995年5月27日)



写真2 ひまわり道の花を書いたもの: 岡田北部地区(鹿取)

みると無念さが胸に迫りました。ガレキから人々の建設への過程の第一歩として、夏から秋に向けて荒れ地を花畠にしましょう、暑くてほこりっぽい日々に備えて。

第1段階 「ガレキに花を」
ガレキの花活化

第2段階 「奈々に苗を」
敷地周辺の苗木(記念樹)の植栽

第3段階 「まちに生垣を」
建物の生垣・庭づくり

第4段階 「都市に広めを」
まちのひまわり花いっぱい
という「阪神市街地緑花再生プロジェクト」です。

こうやって案はできましたが、花や木々は好きだけど、全くの素人でした。

何から手をつけていいのかさえ分からず、何時かの植屋さんに電話をかけることから始めたのでした。

何度も壁にぶら当たり、どうしたものかと思っていましたら、東京で空き地にワイルドフラーの種をうまく活動をされていた伊藤雅春さんが、第一回芸さんを紹介してくださいました。早速、北島さんと児玉さんが現地を訪ねてくださり、「荒れ地にまくだけて世話ができないでも、水をやらなくて、芽が出て花が咲く」というおそろしい“条件”を涼しい顔でお願いし、種をプレゼントしていただきました。

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークや各地のまちづくり協議会を中心にまち隊を結成。1995年5月27日から「ガレキに花を」がスタートし(→写真1)、2年余りいろんなところで花が咲きました。

まずは、譚区の全壊した我が家とそのまわりの600~700m²がコスモス畑になりました。長田区では、区画整理事業で道路になるはず(種をまいたときはまだ決定されていませんでした)の場所をヒマワリで道路にしました(→写真2)。

芦屋市では、邸宅の跡にまいたコスモスが2年以上経った今も花を咲かせています。翌年(1996年)には、東灘区の谷崎

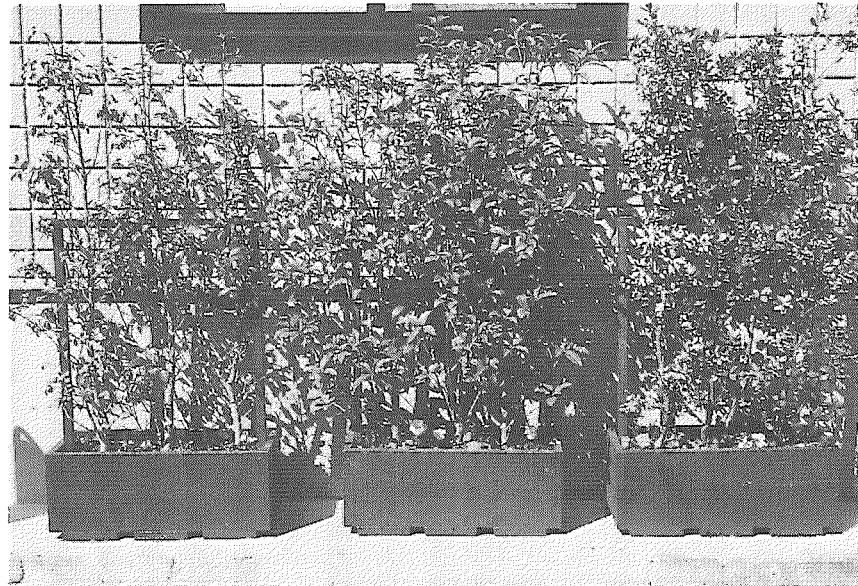
「ガレキに花を」の活動は単に荒れ地に花を咲かせただけではなく、その地にかかるある人々のそしてその周辺の人々の町にかかわるきっかけになりました。

人々は自分の住まいだった場所のガレキを取り除き、耕し、種をまくということから、その地にもう一度命を蘇らせる教えられました。それはそのまま、その地のまちづくりへと人々を導くこの第一歩にもなりました。

再びなった我が社は震災以前の木造2階建てから鉄筋コンクリート3階建てとなり、1階にオーブンなスペースをつくりました。

ここは地域住民の方々の集会施設に利用してもらうのはもとより、まちづくりにかかわる人々の勉強や研究の場として開放いたします。庭の草木を眺めながら、100年先の神戸のまちに想いを巡らせ、今始まったばかりの本当の復興とまちづくりを語り合いたいと思っています。

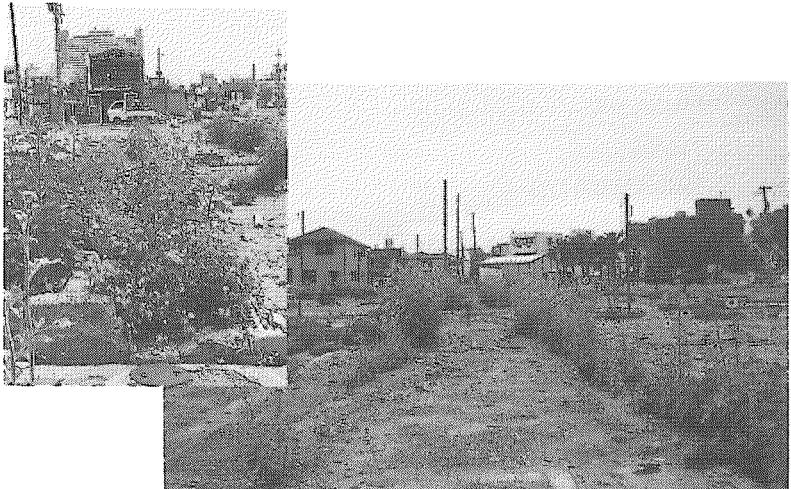
あまかわよしみ 1950年兵庫県生まれ。ニース(さんもくせい)の発刊、「ガレキに花を咲かせましょう」運動に加え、HAR(ハル)阪急現地事務局、ランドスケープ復興支援会議(阪神グリーンネット)を運営



これが桑原さんの考案の画期的移動式生垣です



(出典：『ステーション』1996.1号、コープこうべ)



がれきに花をさせましょう
くまちの復興への貢献と被災者への配慮>
震災で倒壊し、現在、更地になっている敷地に緑や花を植えることにより、被災した人々に、潤いと安らぎを与えるようとしている。

第10・11回神戸景観・ポイント賞特別賞受賞

(出典：『世論時報』平成8年8月号、世論時報社)



(出典：『ランドスケープ関西』
N.36、(株)日本造園コンサルタント協会（現在、(株)ランドスケープ
コンサルタント協会）関西支部)

インタビュー（第6回）

阪神・淡路大震災後、復興に向け様々なまちづくりへの取り組みが行われています。その中で現在、ガレキ跡地の空地となっているところに花を咲かせようを展開している天川さんと、都市に文化・アートの想いで孤軍奮闘中の環境アートのプロデューサーの折田さんにお聞きしました。



あめみやよし美
天川佳美
1971年生まれ
1991年～1996年 株式会社 神戸市復興研究所
1996年～現在 もちづくり株式会社コープラン
◆折田和也1996年阪神大地震
●造ますや林戸木でむすむ会
●甲賀文化商店
●コイの会
●阪神たま大阪府民まちづくり支援ネットワーク
ワード事務局

ガレキに花を咲かせましょう！

Q. 天川さんは「ガレキに花を咲かせましょう」という運動を展開されているのですが、まず、その経緯からお話を聞かせていただけませんか。

A. 震災の後、3月位にガレキが片付きましたが、その段階でその土地にどう関わったらいいかということを考えいく中からこの運動は

それで種蒔きの日を決めて、後の業者さんに相談して種の種類、耕く時期などの技術指導をして頂きました。

6月27日が初日ですが、3月位にえり始めた段階にそれだけの時間がかかりました。種の業者さんには、夏に咲かせたいという事と水をあまりやらなくとも咲く種類をという2つの条件を出したのですが、10月になっそれがどれだけ実現できたかというところがどうやく分かれました。いうのも誰も水をしなくていい種類を注文したのはその時の間違ひなものでしたが、今年の夏は本当に雨が降らず、暑い夏でした。それでも、種の種類をきちんと選んで下さったので、水やりをしなかった所でもちゃんと花が咲きました。人が思い付いて始めて、自分たちの仕事の前立ちゅうとして始めたことにきちんと対応してくださった園芸のプロの方々には今は脱帽しております。

こうしてこちらの希望通りの成果を得ることになりました。そこで、もう一度、秋に種を撒いて、春に花を咲かせましょうという花の取り組みをしようとしています。これで終わりかどつかについて花に閉じてはまだ決めていません。一応一段落になると思います。というのも、その時期にはお家が立ちはじめると聞いています。

それでも、建築が始まつたら、少し樹木というか苗木の方に移行していくくやううるやかな「市街地林化再生プロジェクト」を進めようと思っています。



(出典：『神戸新聞』1995.7.26 夕刊)



咲かせよ花よ咲け。

(出典：『神戸新聞』1995.12.18)

震災が半年が過ぎ、今
かせよ花よ咲け。月下向、園芸屋の植木屋に草花をきて帰る。
大阪府高槻市、その一ヶ月後を終えた。被災地の花を育て、生残
者の想いに叶へようと、長田区住民の協
力で花壇をつくった。これが、人を笑わせる
花壇だ。

咲かせよう花

神戸灘区

震災が半年が過ぎ、今
かせよ花よ咲け。月下向、園芸屋の植木屋に草花をきて帰る。
大阪府高槻市、その一ヶ月後を終えた。被災地の花を育て、生残
者の想いに叶へようと、長田区住民の協
力で花壇をつくった。これが、人を笑わせる
花壇だ。



がれきに花を咲かせましょう

神戸と芦屋
お花畠出現

阪急神戸線の近くにコスモス
が咲き乱れるお花畠がある。写真。「がれきに花を咲かせ
ましょう」と阪神大震災復興市民まちづくりネットワ
ークが呼びかけ、神戸と芦屋の
計十三ヵ所に五月末、十五種類の花の種をまいた。
市民まちづくりネットワー
ク事務局がある設計事務所コ
ミ・プランも地盤で建物が倒
壊、その跡地約百平方㍍にコ
スモスとヒマワリの種をまいた。
天川さんは九ヵ所、芦屋
は四ヵ所にまいた。
種は五千平方㍍分を用意、
種まきに三週間かかった。
天川佳美さんは「震災まで
住んでいた人たちが、時々訪
ねて下さるようになればと花
を咲かせました」。神戸では九ヵ所、芦屋
は四ヵ所にまいた。

咲く花の準備をしている。来る月
月初め、お花畠になる空き地
種まきをしてもらえる花
咲かじいさん、花咲かばあさ
んを募集する。

問い合わせは神戸市灘区役場、
岳町2の5月20日、まちづくり
(株)コー・プラン天川佳美さんまで。
FAX078-842-0000。

(出典：『朝日新聞、震災版』1995.8.17)



震災500日、再建を持つ被災地にお花畠が広がる=午前8時20分、神戸市長田区海運町

(出典：『神戸新聞』1996.5.30 夕刊)



希望の花

ガレキに咲いたコスモスやヒマワリはまさしく私達ネットワークのシンボルでした。このすがすがしい一輪の花が私達に教えてくれたことは「希望と勇気」だったと思つています。みんなで力を出し合えばどんなことでも立ち向かって行ける勇気、多くのことを乗り越えて行ける希望、小さな花がそれ教えてくれました。

ガレキに花を咲かせよう

温かい義援金を附けておられた。神闇住宅地がどうな
野次馬でござるのです。神戸へくなつた。近所お

天川さんの投稿が、新聞の論壇に掲載されたのは阪神大震災からちょうど半年目の1月十七日だった。

(文責・羽畠敬郎)
（出典：『日刊建設工業新聞』1995.10.4）

阪神大震災復興に向けて 都市の再生と

天川 佳美氏
(まちづくり(株)
(ヨー・プラン)



あまかわ・よしみ
1974年都市・計画・設計研究所へ入所。88年
まちづくりローーク・ブラン
ンに所属。「港まち神戸を愛する会」「共同研究
1930年阪神間世界「甲子園文化研究会」などで
活躍。現在「阪神大震
災復興市民まちづくり
支援ネットワーク事務
局」



我が社の跡地は7月の終わり頃、コスモスの花盛りでした。道路にポツンと立っているのが「きんもぐせい通り」のシンボル、隣の嘉村さんが残してくださった金木犀の木です



コスモス畑の向こうに第1、第2サティアンと呼んでいたプレファブ。三角屋根が8人で仕事場にしていた建物で、C棟と呼んでいます



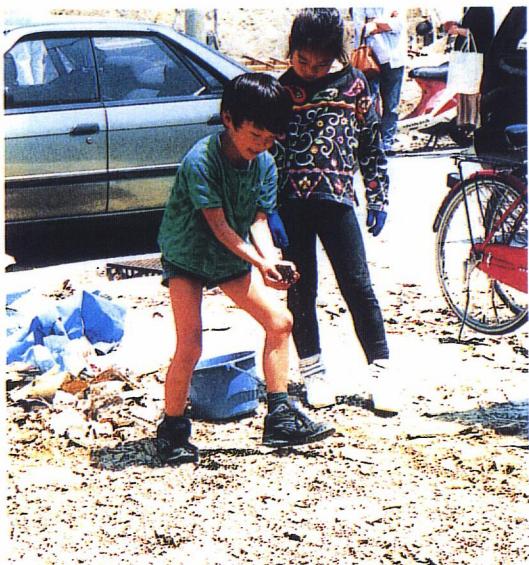
夏休みになると子供が蝶々やトンボを探りにきました



鍬や鋤を担いで種蒔き隊は今日も行く（鷹匠中学校の東側のあたり）

それから二ヶ月後、七月中頃から楠丘町のあちこちでコスモスが咲き始めました。夏休みになると、子供達がとんぼや蝶々を追う姿もみられました。

夏を思わせる日差しの五月下旬「ガレキに花を」の活動は始まりました。この活動に参加してくださいました方々や支援ネットワークのメンバー、その子供達約四〇名で我が社の跡地と楠丘町の界隈に鍬や鋤を持ってガレキ隊が種蒔きをしました。荒れた解体跡地は堅い堅い地面でしたが、なぜか皆の顔が晴れ晴れとしていたのが今でも強く印象に残っています。



上山舞ちゃんと隼ちゃん



（左）ガレキに花を・灘
（右）コー・プラン跡地の種蒔き風景

（左）一九九五年五月二七日 神戸市灘区楠丘町二丁目／コー・プラン事務所跡地

鷹取地区での種蒔き風景



2回目の種蒔きは場所探しも結構大変でした

ガレキに花を・長田
部
《一九九五年五月二八日 神戸市長田区海運町、日吉町／鷹取、野田北
部》

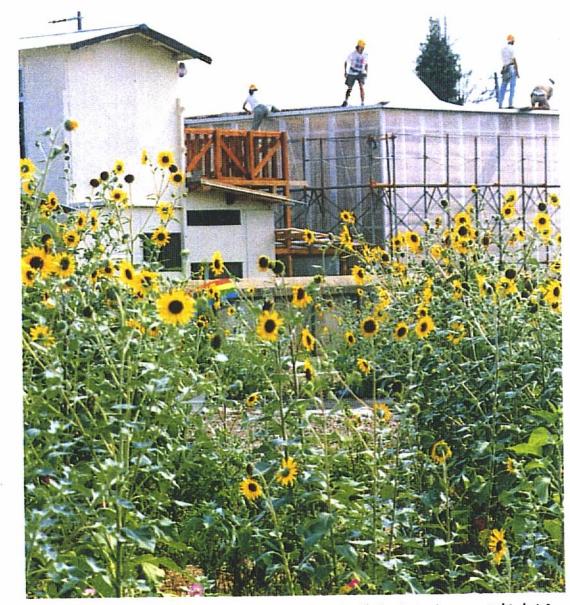
大国公園に集まつてくださった人達は、前日の灘区と違い、住民の方々でした。大きな街区で街が焼失してしまったので本当は映画の『ヒマワリ』のように全域ひまわり畑にしたかったのですが、現実はそんななまやさしくなく耕すだけでも骨が折れました。「区画整理が決定したらここが道や」という線状のヒマワリはこの街の元気の証でもありました。いろいろな苦労を越えて、この地区は日本中のお手本になりました。



地を這うように咲くペチュニア、ヒマワリの姿も見えます



熊本大学延縫研究室の斎藤さんと発芽具合を見て回ったとき、ペチュニアが咲き始め、第一園芸さんのお二人が本当の花咲か爺さんと判明したのです



8月鷹取のヒマワリは本当にたくさん咲きました。工事中は鷹取カトリック教会のペーパードーム



1995年2月18日、我が「きんもくせい協調建替」の最初の一歩の日



1997年11月再建完成。シンボルの嘉村さん宅の金木犀は健在です



1階の茶店きんもくせい。展覧会は私達の敬愛する向井正也先生の絵です

『一九九五年一月 我が社の倒壊・解体現場』
我が社のある灘区楠丘町は戦前からの建物も少し残っている普通の住宅地でした。事務所として使っていた住宅も昭和初期の木造二階建、北側六メートルの道路を挟んで六軒の長屋ももちろん木造で平屋でした。平屋だったことで瓦が落ちただけのように見えますが、立ち入り禁止の“赤紙”（実際には黒字）が貼られていました。

地震発生二日目から、崩れた建物の中の使えそうな書類や機器を運びだす作業が続きました。一週間目にこれ以上は人の手では無理ということになつて、機械での解体撤去となりました。



開店時間／10:00～17:00（日曜、祝日は休みです）

茶店きんもくせいの案内はがき。故宮脇さんの最初の下絵に小林が完成時の色を塗って作りました



1995年1月21日地震発生5日目、自衛隊の方々が倒壊した事務所の瓦を道へ降ろしてくれました



事務所の駐車場の鉄扉を最後に持ち上げて、カッタ君（解体機）の仕事はお隣へと移動して行きました



11月の終わりごろ、コスモスも枯れて『兵どもの夢の跡』。さあいよいよ再建じゃあ！

きんもくせいのご案内

- フロイドリープのパンの販売
- 茶店きんもくせい
(コーヒー、紅茶のみ)
- 震災復興関連商品展示販売
(出版物、Tシャツなど)
- 地区住民作成物の委託展示販売
(菓子、手芸など)
- 貸会議室、貸展示室、各種教室の運営

きんもくせい/KINMOKUSEI

Community Communication Cooperative Space
神戸市灘区楠丘町2丁目5番10号 電話078-855-3350 営業時間09:00～17:00
FAX: 078-855-3351 電話番号078-855-3350



和田誠さんのお返事の手紙とマーク

大きな木の下で人々が手をつないでいるこのマークは私達支援ネットワークのシンボルです。なにもわからずがむしやらに前だけを見て走っていたような半年が過ぎ、我が社の事務所跡地に咲いた希望の花「コスモス」も盛りを過ぎて、さあ！いよいよ腰を据えてといふところだつたと思います。

一九九五年九月、和田誠さんの描いてくださったマークをまずはグッズにするために東大阪まで出掛けて行きました。立派な染色工場を社長の松尾治さんの案内で見せていただき、ここでこのマークが刷られて行くのかと感慨深かつたのを覚えています。
その後、Tシャツや袋、エプロン、旗などに使用し、今でも私達の大切なシンボルです（49～52頁参照）。

天川さん。

こんなのは どうえす 作ってみます。
色々な色 第一集ですが、カラーボード
のようにどん色もきゆいので、(13)113に
使うと恩います。自由にやつ下さい。

主旨には満足すると思ひますので、内訳表
などあらかじめ、遠慮なくおしゃれ下さい。

和田誠



和田誠さんのお返事の手紙とマーク

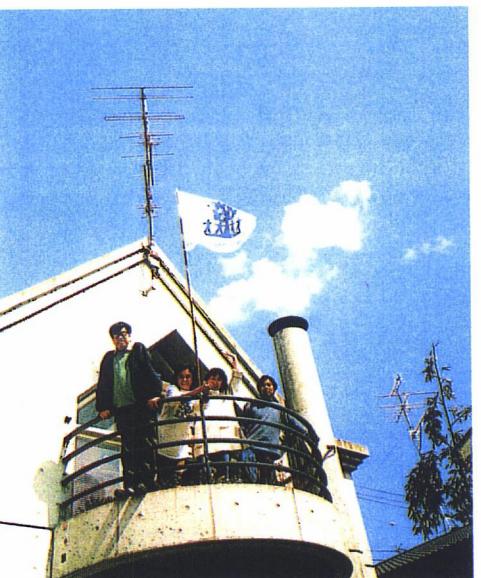
一九九八年五月二日、あの日（一九九五年二月一八日）と同じように宮脇さんの料理に皆、舌鼓を打ちましたが、違っていたのは、もう決してこんな楽しい日が二度と来ないことでした。多分これが宮脇さんの最後のエプロン姿です（67頁参考）。



宮脇さんがシーザースラダを作っているところ。私は涙を堪えるのがやっとの一日でした



最初の製品長袖
Tシャツを着て
います。フェリ
シモに販売の相
談を行った日で
した



C棟に建てた復興まちづくりハウスの旗。手を振っている女性は大阪在住の画家の塚野由利子さん。「ガレキに花を」に共感し、たまたま訪ねて来てくださいました



4トン車に一杯詰めて届けてくださる日本花卉流通センターの車。降ろすのも大変



1996年春、コー・プラン跡地に三田から少し持ち帰ったパンジー。きんもくせい通りの花一杯はこの日から



1998年8月、茶店きんもくせいの前はいつものように花盛り



高徳町の寿公園の隅っこ市民花壇にも、一宮からの花が彩ってきました



1998年12月、念願の角田ナーセリーネットワークさんを訪問。花苗を作る過程などご苦労を少しだけですが理解できました

その後、豊中の日本花卉流通センターというところの加野さんがボランティアで花苗を運んでくださるようになります。そして各地のまちづくり協議会がそれぞれ車を立てて各地へと配つてくださるようになり、復興公営住宅のコレクティブハウスへも配りました。四年経つて、一九九八年一二月にやつと一宮市の角田さんのところへお礼に伺うことができ、まちづくり協議会の人々やネットワークの私達は苗を作つておられるところや、角田さんのお話しを直にお聞きできました（58～59頁参照）。



復興公営住宅の一つ、大倉山ふれあい住宅の皆で使うふれあいルームの前も、花で飾られました



雨の中で「ガレキに花を」と花文字を描きました



5万苗のパンジーは三田市の「人と自然の博物館」の隣に置いてもらい、各地区の方々に取りに来ていただきました



野田北部地区的トラック。何と！即席にしろこの棚はすごい！長田区まで無事に帰れたのが不思議なほど。このパワーが野田北部なのです



1999年8月南芦屋浜。7回目の花苗はやっと復興公営住宅へも届けられました





暑かった夏の日も、夕暮れが訪れ、空の色が変わる頃、そぞろ集まって映画会が星空の下に始まります。
「震災後、映画なんて忘れていました」という感想に、「ああ私もや」と感慨深かったです



ブルーシートに座って肩を寄せ合い、画面に見入る親子



菅原市場の駐車場でも上映

星空映画会

《一九九七年六月二九日芦屋浜、八月二三日菅原市場》

芦屋市の南の埋立地にできる復興公営住宅への入居に伴う「暮らしのワークショップ」という活動がありました。二回目のプログラムで仮設住宅の中の空地にスクリーンを張つて映画会をやりました。スクリーンの向こうに仮設住宅が建ち、その向こうに高層住宅が見え、やがて西の空が茜色から薄紫に変わると、映画が始まりました。

長田区の菅原市場はご存じ寅さん（『男はつらいよ』）最後の映画のロケに使われた場所です。市場の駐車場にスクリーンを張つて、またパイプ椅子を並べ、皆静かに画面に見入つておられました。



きな花を咲かせた「はるかちゃんのひまわり」は、手幹線沿いのヒロインでした



掃除を手伝ってくれた子供達の心の中にも、はるかちゃんは生き続けることでしょう



《一九九六年七月 神戸市東灘区岡本》

震災から一年半が経過し、真夏の太陽が照りつけるころ岡本ではすくすく育ったひまわりが咲き始めました。旧谷崎潤一郎邸などの解体跡地だけでなく、山手幹線道路沿いも大輪の花を咲かせ、道行く人や車の運転手さんの心を和ませたことでしょう。

沿道整備の方々が水やりをして下さるときにきっと抜かれてしまうと覚悟をしたのが、嘘のように立派に育ち、花を楽しませてもらつたお返しのつもりで涸れたひまわりをネットワークのメンバーで片付けました（60～63頁参照）。



芦屋市前田町



1995年5月、ハナヤ勘兵衛さんというカメラ屋さんの敷地跡での種蒔き



1995年6月、国道2号線沿いの歩道にコスモスの芽が出来ています



1997年10月、区画整理区域内ですが、こんな可愛い店でのとりあえずの営業が始まりました。あの日のコスモスはさまざまの花に姿を変えてお店を彩っています

芦屋市公光町

1996年5月、2度目の花はポピーです。
荒れ地を耕し、丸と三角と四角をかたどって種を蒔きました。高橋さんが見
ることのできなかったポピーです



1995年7月、小路市場の通路だった敷石に沿って混合種を蒔きました



1999年7月、4年が経ち、広大な敷地は大きなマンションになりました

神戸市東灘区本山



1995年7月、敷地の境界に蒔いた混合種が可憐に咲いています



1999年7月、4年前の雫れ種がいまだに花を咲かせると聞きました。再建されたお家の玄関横には『ひょうごグリーンネット』の辛夷の木が植えられています



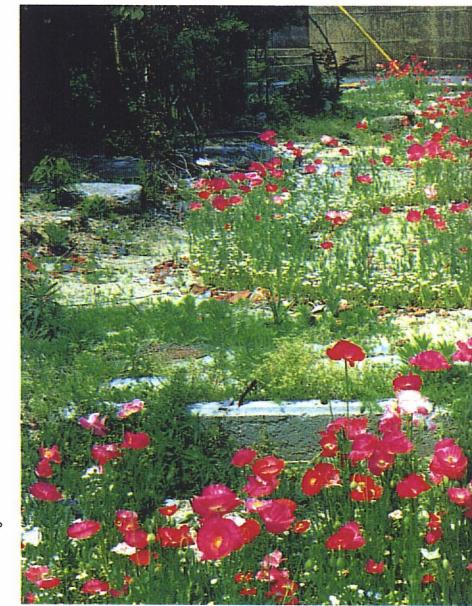
1995年5月、種蒔き隊が耕しています



1995年6月、わずかに芽を出しているコスモス。この後レンガが見えないほど大きく育ったコスモスが美しかったです



1999年7月、4年前と同じ風景。違うのは門が閉まっていることだけです



種蒔き場所のその後

和田 誠 様

はじめまして。私は天川佳美（あまかわよしみ）と申します。神戸市灘区に住まいと仕事場をもっています。この度の阪神大震災では自宅（築25年のアパート）は倒壊を免れましたが、仕事場（築65年の洋風木造2階建）が全壊してしまいました。

昭和4年に建てられたかわいい建物で、持ち主の方も借り手の私たちも大切に使っておりました。あの未明から数えて10日目の1月27日から解体工事が始まり、大きなエンボンがまるで緩慢な怪獣のように敷地を歩き回り、いろいろな思い出も建物とともに容赦なく壊してしまいました。

周りは住宅街で戦前からのお家もたくさん残っていましたが、桜體のような埃と騒音の続く中、それらの古い住宅もひとつ残らずなくなってしまい、今はご近所で瓦の屋根の家は一軒もありません。

あちこち広場になって風通しはよくなつたものの、人々も少なくなり夜はすっかり暗く何とも寂しい町になってしまいました。灘区でもこの周辺は亡くなられた方が多くしかもお年寄りから学生さんまでがその犠牲になられ、あちこちの供花はいつまでもかたずけられず枯れたまま放置されていて見た目にも痛ましい日々でした。このままでの暑い夏を迎えるのはあまりにやり切れないと考えましたのが『ガレキに花を咲かせましょう』（きんもくせい第10号をご参照ください）でした。

一面の花畠を想定し神戸市内9ヶ所、芦屋市内に4ヶ所計13ヶ所ほど1000m²にコスモスとヒマワリの種をまきました。

観測史上まれな暑さといわれた今年の夏でしたが花花は見事に咲きました。私たち、阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークは来月9月から10月にかけても“花咲じいさん花咲ばあさん”を続けます。花の次は『木』です。

日本中の子供達にいろいろな所で苗木を育てておいて下さいとお願いしています。お家が建つようになったところや公園、町のコミュニティの場所などへ大きくなった苗木を一本づつ持って子供達が訪ねてきて下さる日がいまから待ち遠しいくらいです。

このプロジェクトを『阪神市街地緑花再生プロジェクト』とし、これから先何年続くか分かりませんが私達がお手伝いできるかぎり続けていきたいと思っています。

そこで、このプロジェクトのシンボルマークを是非、和田誠様に描いていただけませんでしょうか。

あまりに唐突で勝手なお願いと存じますが、この熱い思いを和田様の絵に託したいのでご連絡をとっていただき方法がありませんかと、毎日新聞社大阪の西村さんという記者のかたにお願いしました。そして東京本社の石川さんにこの手紙を届けていただくことになりました。

阪神間地域に住む約300万人の人々はどんな形であれみんな被災者です。たくさんの方々に助けていただき、助けあって7ヶ月を過ごして参りました。

われわれネットワークの人々もおおくの方々の支援をいただきここまで活動を続けて来れたと思っています。プロジェクトの今後の展開に欠かせないシンボルを、広く世界の人々にもアピールできますよう、和田さんのお力を貸して下さい。そして私達の希望を述べてください。

1995年8月31日（木）
天川佳美

コスモスが炎天下に咲きそろい、次の春に花の咲く種
ときの準備を考え始めたころ、こんな手紙を書きました。
その4。

今読み返すと、まるで脅迫文のようですが（天川の無謀）

6 世界の和田誠さんへの厚かましいお願ひ



1998年5月2日（土）、やっとの思いで建物を訪れて下さった宮脇さんをみんなで囲んで

心に咲く花
このコスモスのスケッチは、神戸つ子のイラストレーター「おさないまこと」さんが、ガレキに咲いたコスモスをこんなふうに表現してくださいました。ほのぼのとした彼ららしい絵で私は非常に気に入っています。和田誠さんのマークと同じ時、Tシャツにプリントしましたが、好評で気がつけば、もう手元にはありません。時々仲間がこのTシャツを着ているのを見ると、あのころの殺風景な神戸が思い出されます。それでも負けずに頑張つてた人々のことと一緒に思い出します。
ガレキに咲いた小さな花は、いつか大きな花になつて、みんなの心の中に今も、咲き続けています。



当時毎日新聞に和田誠さんの連載図み記事がありました。震災前からの連載だったと思います。毎日読んでいましたし、もともとあの絵が好きでしたので、知り合いだと勝手に思っていた訳ではありませんが、手紙を書こうということになつた時、何となるとは思いました。でもそれは今思えばやつぱり震災高揚のひとつではあつたんでしょう。

このお願いの手紙にあるように、「ガレキに花を」のマークがほしいねということになり、自分達でもちよつと書いてみたり（建築関係の人はおそらく、皆絵かきやデザイナーなど自分では思っている）して、ああでもない、こうでもないと言つていたのですが、「やつぱりきちと書かんとあかんでえ」ということになりました。「きつちり書かなあかんのはわかつたけど、そうしたら誰やねん」「世界にアピールするのやから、有名人やで」「有名人つたつて、知らんで」。またまた、ああでもない、こうでもない。そこで、突然ひらめいた。「和田誠さんがええわ」「そらええけど、よすぎるでえ」「どうやつて頼むんやあ」「手紙書こう！」。無謀としか言いようのない会

話ですが、こうやって私は自分のひらめきに半ば酔つていて「どうやつて」という問い合わせにすでに毎日新聞の連載を思い浮かべていました。ただ手紙を書いて「私はずーっと和田さんのファンでした。毎日新聞も読んでいます」ではだめだ。手紙は中身もさることながら、何より確実に、絶対、和田さんご自身の手に直にわたらなければだめと思いました。いろいろ考えて、たまたま取材にいらしたことがあつた毎日新聞大阪本社の学芸部記者の西村浩一さんに相談しました。東京本社学芸部の石川さんという方をご紹介いただき、石川さんに趣旨を説明する手紙を書いて、その中に和田さん宛の封書を入れ「どうか手渡してください」とお願いしました。これも今思うと脅迫ですね。

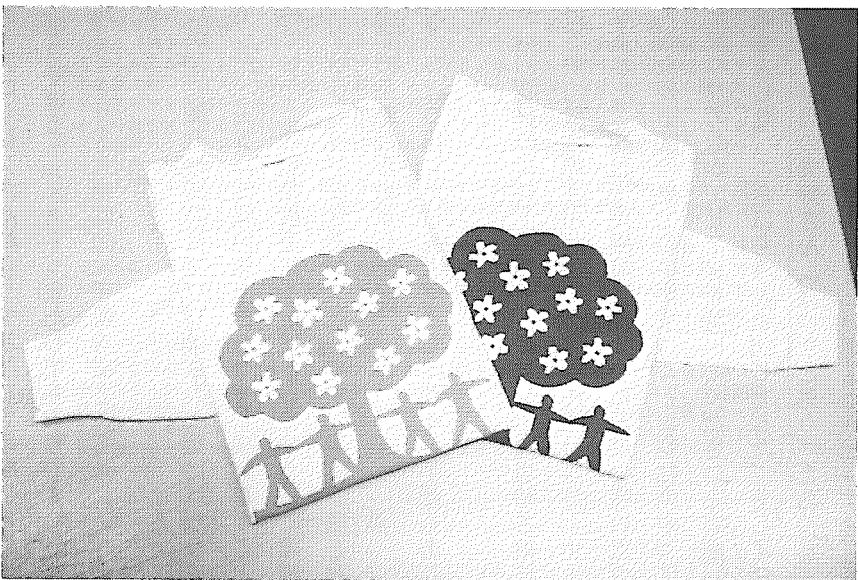
そして石川さんの指示どおり九月五日に「秘書の方」に届いているかの電話確認をし、九月八日にお返事とマークをいただきました。

興奮して受け取つてみんなでにっこりしたのは昨日のことのように思い出します。ほのぼのとしたこのマークはこれ以後私達の元気の基として、いつもそばにあって

優しく、力強く支えてくれています。

受け取つてすぐに和田さんにお礼の電話をし、最も難関のお金のことを恐る恐る伺いました。「あなた達もボランティアでやつておられることですから、私もボランティアでやりましょう。どんなふうにでも自由に使ってください」。たぶん一字一句まちがいないと思いますが、そう言つてくださいました。「どんなことにも」とはおつしやらなかつたと思いますが、私達はきっと「どんなことにも」使つてしまつてゐるのではないかと心配しています。すぐにTシャツや手提げ袋、エプロンなどを作り、種蒔きの資金カンパになりました。これはまたいろんな方が助けてくださつて、たくさん買つてくださり、購入の輪を拡げてくださり全国へと、このマークが大活躍をしました（Tシャツはまだ残つています）。

それから「復興市民まちづくりハウス」と書いて大きな旗を作りました。これは各地でまちづくりの拠点になつている小屋に狼煙として竹竿で（ちゃんとポールのところもあつたようです）高々と掲げました。新しく何かに使う前に和田さんには「連絡をする」というお約束を申



グッズ第1号、長袖Tシャツ

し出ましたが、それも「要りません、ご自由に」とおつしやいました。

それにお返事はありません。和田さんご自身も震災復興のボランティアをいろいろされており、よく新聞やテレビのニュースで拝見致しました。私達のボランティアまでよく聞き入れてくださったものだと改めてここでお礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

余談ですが、このマークのお願いの前になりますが、とてつもない「手紙」のこともありました。ちょっと恥ずかしいのですが、それを披露します。

以前に書きました、第一回の種蒔きで長田区「鷹取のヒマワリ」にとてつもないアイディアがあつたというのは、じつは後日談があります。海運町のヒマワリ畑は計画では広大な畑になるはずでした。そんな話をしている時、「見渡す限りのひまわりが咲くんやね」という散髪屋の林さんの笑顔について私が「ああ映画の『ひまわり』のあのシーンのように鷹取のひまわり畑の中に

ソフィアローレンさんが立つててるなんて最高やろねえ」「呼ぼう呼ぼう」「ええー」またしても乗りやすい無謀な天川、イタリア大使館宛に手紙を書きました（天川の無謀その5）。

しかし、鷹取地区のヒマワリは広大な畑にはなりませんでした。あまりに堅い焦土となってしまい耕すことが困難でした。区画整理道路予定地として辛うじて線描きのヒマワリの道ができあがつたのです。手紙は涙を呞んで出すのをあきらめました。

もうひとつ出したけれど何ともはがゆい手紙もありました。

テレビ朝日のニュースステーションでは当時各地に向いて羽田健太郎さんがピアノを弾くというコーナーがありました。楠丘や芦屋の瓦礫の中に忽然と咲いたコスモス畑や長田区の焦土の中にすつと青空に向かって咲くヒマワリのなかでピアノを弾いてくださいとお願い文を書きました。これはちゃんと出しました。そして届きました。担当の矢野さん（だつたと思う）とおつしやる方がご連絡をくださり現地を一度見たいというお返事に

イタリア大使館 御中

突然にこのようなお願いを致します無礼をどうかお許しください。

1995年1月17日の未明、阪神間を襲った地震は日本国内より海外の方が早い情報だったといつてもよいくらいでした。

わたしたちの愛した町も家人もたくさん犠牲をだし、悲しみにくれ二度と立ち直れないと思った月日も7ヶ月が経ち、今、すっかり空地になった家の跡でひまわりが咲きました。

壊れてしまった建物から書類を拾ったり、傾いた家から家財道具を引っ張りだしたり次々と壊されていく家々をみんな呆然と眺め、きっともう一度ここに帰って来よう、家を建てようと思っているかのような後ろ姿でした。解体のユンボが鳴り、すごい埃と空しい気持ちの立ち込める春の終わりの日に『この場所をお花畑にしよう』という思いがめばえました。

瓦礫から家々の建設への過程の第一歩として、夏から秋に向けて荒れ地を花畑にしよう。暑くてほこりっぽい日々に備えて。

第1段階	「ガレキに花を」	ガレキの花畑化。
第2段階	「家に苗木を」	敷地周辺の苗木（記念樹）植栽。
第3段階	「まちに生垣を」	建物の生垣・庭づくり。
第4段階	「都市に広場を」	緑いっぱい花いっぱい。

という阪神市街地緑花再生プロジェクトの第1段階です。

たね屋さんを探し（大阪の第一園芸さんという会社）相談しましたら、夏までに花が咲くという条件では、コスモス、ヒマワリ、サルビアでしかも単独種ではなく別のものも少し混ぜたブレンド種でした。できる限り住民のかたがたにお話しして参加していただき、5月の27日から2週間、延べ百人以上の人々の手で神戸市と芦屋市あわせて13所に撒きました。そのなかのひとつ、神戸市の長田区鷹取東地区は住民のかたがたの強い要望で「ヒマワリ」と決まり、5月28日の日曜日、鷹取カトリック教会のミサに来られた多くの外国人（ペトナム、フィリピン、コリアなど）の人々と地元の人々約50人が一緒に第一園芸さんからお借りしたクワヤスコップで焦土となり、たくさんの涙や思い出が埋まりすっかり堅くなった広大な大地を延々と耕し、ここがきっとお花畑になるようにとの願いを込めてヒマワリの種を撒きました。種蒔きがおわったその日の夕方みんなでビールを飲みながらわらはしは「ここに日葵が咲いたら、ソフィアローレンさんをおよびしたいね。あの『ひまわり』の映画のシーンのようになるかな」といったら、皆が「賛成！絶対よぼう」という声になりました。

種をまいた日から2ヶ月半、地元のかたがたは毎日様子をご覧になっていました。双葉がでて本葉になりどんどん育って蕾ができたときには新聞社のかたがたもそろそろ見つけてくださり、記事になりました。

さあ、いよいよソフィアローレンさんの出番ですということになったのですが、一面ひまわりというわけではなく、しかも咲いているのは少しさず。いくら園芸のわたしでもこれでソフィアローレンさんを呼ばうとは無謀と思うのですが、みんなは心待ちにしています。どなたにどう連絡したらよいのかもわかりません。

かってなお願いですが、もし何かの方法がありましたらお教えください。

阪神市街地緑花再生プロジェクトの第2段階以降も少しですが進行中です。家が建つことの決まったところはお庭のどこかに木を一本プレゼントしようということで、今造園関係のかたがたに呼びかけて苗木を育てもらっています。あの怖かった思いや悔しかったことの「メモリアルツリー」をと。そしてそのつぎは家々の周りは生垣にして、やがてそれが繋がってまちの中の緑がどんどん増えていくようにと願っています。

出さなかったイタリア大使館への手紙

私達は「やつたあー」と喜びました。はつきり言つてミーハーです。大胆にもプロに向かつて脚本企画までしてしまいました（天川の無謀その6）。

鷹取の焼け野原になつてしまつたところにヒマワリが群れて咲き乱れピアノを弾いてる姿が遠くにあります。それがずうーと近づいて来てあの映画『ひまわり』のテーマソングが流れます。

楠丘のボツンボツンと残っている住宅地の中の一角に色とりどりのコスモス畑があるそのコスモスの中に埋もれるようにピアノが見え隠れして『秋桜』のメロディ。

あれこれ言つても仕方ありません。

この企画の最大の敵は何だつたのでしょうか。

現地近くまで来たと国道四三号線から携帯電話があり、道順を説明してもうすぐかなとみんなで待っていました。おかしいなあ遅いなあと言いかけていた時、電話がなりました。「すみません、緊急指令がはいりました、オウムです。急速東京へ帰らなければなりません。一旦帰りますが、必ずご連絡いたします」。それつきりでした。一ヶ月

久米宏さん、小宮悦子さん、はじめまして。神戸市に住み、仕事をしています天川佳美と申します。ニュースステーションは最初からのファンです。私の記憶では女性のアナウンサーを決定する予行演習のような期間があったように思います、が、その時と小宮さんに決まると思っていました。なにか思い出のことのようですが。

淡路島の北側、神戸の南側を瀬戸内海とする兵庫県南部（阪神・淡路）大地震の日、1995年1月17日午前5時46分より半年がたちました。

日本中、世界中をあの傾いた阪神高速道路の写真が駆け巡り、長田区をはじめとする多くの火災の映像、倒壊家屋の前で呆然と立ち尽くす人々の姿、避難所での生活の様子、テントに降りしきる雨、ニュースが流れ続けた毎日でした。そして1ヶ月、2ヶ月、1年を追ってニュースの中身が変化し、今6ヶ月を迎える新聞やテレビは『あの日の場所は今』といった特集が組まれるようになりました。

私の会社のある灘町の椿丘町2丁目は東灘区との区界に流れる石屋川のすぐ西側の住宅地の中で昭和4年に建てられた木造2階建てでした。改修を重ねた古い建物でお借りして9年、皆で大切に使い愛着のあるものでしたがが倒壊7には耐えられずあの日の未明、静かな音とともに倒れたと後からですがご近所の方から聞きました。

壊れてしまった建物から骨頸を拾い、10日目くらいに我が家らしい社屋は9年間のいろいろな思い出と共に壊された片付けられてしましました。ご近所の住宅も順番に片付けられていいくつから8ヶ月はすごい埃と空しい気持ちはち込める春の日々でした。

すっかり広場になってしまった家のあとに残された樹木は新芽がふき、葉をついているにもかかわらず、やがてくる花見も待たずには立ち去り寂しい町になってしまいました。それでもお庭の鉢植えは“きっと帰ってくるよ”との証しのように敷地の真ん中に集められロープでひとまとめにされ、主のいない場所をまるで守るかのようです。

夕方、仕事に疲れて一息、散歩でると土台だけになってしまった家のあとに供花が枯れ、片付けられずに置いたままになっているのを度々目撃しました。やるせない思いでそれを見ながら「そうや、ここを全部お花にしたらええんや！」

ガレキに花を咲かせましょう

瓦礫から各家の建設への過程の第一歩として、夏から秋に向けて荒れ地を花畠にしよう。骨くじでこりっぽい日々に備えて。

第1段階	「ガレキに花を」	ガレキの花畠化。
第2段階	「家に苗木を」	敷地周辺の苗木（記念樹）植栽。
第3段階	「まちに生垣を」	建物の生垣・庭づくり。
第4段階	「都市に広場を」	まちの緑いっぱい花いっぱい。

という阪神市街地緑化再生プロジェクトの第1段階です。

たぬ屋さんを探し、相談し、1月20日ごろから仲間の人達とはじめたく市民まちづくり支援ネットワークで撒く場所を検討し、できる限り住民の方たがたにお話しして参加していただきました。5月27日から2週間、神戸市内9ヶ所、芦屋市内4ヶ所計13ヶ所に花の種（コスモスブレンド、ひまわりブレンド、15種混合など第一園芸さんに配合してもらいました）と土をいっしょに撒きました。敷地全部に面で撒いた所、一面の焼け野原の中の自分の敷地回りや計画道路予定地などを、空から見たらどうなるかと思いを馳せています。

芽がで、蕾が膨らみ、花が咲くのをそこに住んでおられた方々が時々訪ねてくださるようになればと願っています。そしてお家を建てられるようになったら『思いでの木』を植えましょうとお説きし、各家のまわりは好きな木々で整え、表は生垣垣で、裏のお家との境もできれば生垣にし、やがて“緑”がつながり、並木になってグリーンラインが公園や防災拠点へと人々を導く役目を果たしてくれればと思います。

種撒きの日から1ヶ月半、あちこちで発芽し、大きく育ってきました。わが椿丘町では一面の緑のコスモスの中に1輪2輪のピンクの花がほや開花し、このあたりではめずらしく蝶々や赤トンボがたくさん飛んで来ています。7月20日頃にはほぼ満開になるでしょう。

小宮さん久米さんお腹いがあります。ガレキの中の花畠に来てくださいませんか。羽田健太郎さんはコスモス畑やヒマワリ畑の中でピアノをひいていただくという案はいかがでしょうか。わがボス小林郁雄はどうしても『元山口百恵さんのあの「秋桜」を』と声を大にしておりましてこれはきっと久米さんもうなずかることでしょう。でも、ほんとうは「ひまわり」という映画のなかのの大切なシーンのとおりにソフィア・ローレンさんというのが定説なのですが。

「ニュースステーション」への手紙

住所 神戸市灘区椿丘町2丁目5番20号
電話 078-842-2311 FAX078-842-2203
名前 阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局
天川佳美（あまかわよしみ）

沖縄の緋寒桜／角田ナーセリーネットワークへの感謝

九五年一一月二四日から三日間、ウォーターフロントサミットに参加するため沖縄にいきました。神戸からは、港まち神戸を愛する会のメンバーに加えて支援ネットワークのメンバーも参加しました。神戸の震災後の取り組みを聞いてくださるというので、私は「ガレキに花を」を披露しました。シンポジウムのあと那覇で水辺の植物の話をしてくださいたのが環境緑化がお仕事の風水舎、崎山正美さんでした。街歩きの時、紅い花が咲いている大きな木があちこちにあるのが気になり、崎山さんにお聞きしましたら、それが日本で一番早く咲くという沖縄の「緋寒桜」でした。それを被災地で育てられないかとふと思いつき、いろんなことを言つてしましました。「神戸のあたりでも育ちますか、植えたいですね」。これがすべての始まりでした（天川の無謀その7）。崎山さんは私達

が神戸に帰つてから、「大阪芸術大学の植物学の下村孝先生に聞きましたら、奈良、兵庫あたりまでは大丈夫といふお墨付きをいただきましたので早速緋寒桜を贈る準備をします。贈る会は阪神緑花再生プロジェクト支援奄美・沖縄委員会です」と。あらまあ、えらいことになつたぞ。たぶん一二月の始めごろの電話だったと思います。

年があらたまつたら、沖縄のネットワークの人達に呼びかけて贈る植物のリストを作ります、ということでした。受け入れが支援ネットワークでは何ともなあと思いますながら、同時進行でランドスケープ復興支援会議／阪神グリーンネットの発足に間に合つたのです。

阪神グリーンネットの発足が九六年二月六日、沖縄から桜は二月三一日でした。

阪神緑花再生プロジェクト支援メッセージ

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク殿

あの忌まわしい阪神大震災から早一年がたちました。被災に遭われた阪神の皆様が復興に向けて日夜奮闘されている事は報道等を通じて奄美・沖縄の島々にも伝わっています。

この度、「阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク」から花と緑の支援要請を頂きました。早速、奄美・沖縄の市町村及び団体に呼びかけたところ多くの支援を集めることができました。

南の島々からのささやかな花と緑が阪神の皆様の心を慰め、また復興の力となることを願っております。その心を桜前線を追って沖縄県の本部町から北海道の稚内までの日本列島を縦断中の「日本列島さくら駅伝」の一一行に託します。

1996年3月31日

阪神緑化再生プロジェクト支援奄美・沖縄委員会

【構成団体】

鹿児島県大島郡和泊町	町長 泉 貞吉
鹿児島県大島郡知名町	町長 日吉得藏
沖縄県国頭郡東村	村長 宮城 茂
沖縄県本部町	町長 長濱徳松
沖縄県緑化種苗協同組合青年部	部長 下地浩之

【協力団体】

沖縄地球を走る会	会長 比嘉良雄
オリオンビル株式会社	社長 金城名輝
大栄空輸株式会社	社長 菅銘賢一
全日本空輸株式会社	
沖縄支店	支店長 木本靖彦

ランドスケープ復興支援会議／阪神グリーンネット 越前會

平成8年2月

阪神大震災からはや一年以上の歳月が経過しました。阪神間では復興に向けて様々な努力が各地でなされています。都市計画事業区域を中心にして約80ものまちづくり協議会が立ちあがり、住民、行政、まちづくりコンサルタントの方々が日々検討を加えられています。また、様々な団体が復興まちづくりのなかでたゆみない努力をされており、花の植蔵や植樹など、緑化に関するいろいろな取り組みも試みられています。

復興はこれからが正念場を迎えようとしています。研究者やコンサルタント、造園業者そして行政の方も一緒に造園の専門家として、このような復興まちづくりに参加することを呼びかけたいと考えています。都市の中にいからにみどりや水を織り込んでいくかという命題にたいして、ランドスケープにかかる専門家が先頭にたって活動しようではありませんか。任意の個人参加型のグループとして、水とみどりのまちづくりに貢献することを目的としています。専門家のみならず、豊かなみどりや水に興味のある一般市民、その他のグループをネットワークし、復興支援会議に参加することをお願いします。

活動内容 ポランティアとして、或いは派遣コンサルタントとして

- 1 みどりのまちづくりへのコンサルタントや授業活動
 - ・都市計画事業区域の
公園や緑地に関する提案
 - ・白地地区のみどりづくり
 - ・仮設住宅等の環境改善運動
系団づくりや植樹、植蔵など
 - ・生け垣マニュアルの普及
 - ・生け垣の見本園づくり
- 2 實践的活動
- 3 他のグループとの連携、連絡会議の開催

ランドスケープ復興支援会議／阪神グリーンネットの発足

阪神グリーンネットの活動としては、奄美・沖縄の桜が最初の仕事ではありませんでした。二月二十四日、愛知県一宮市の角田ナーセリーネットワークの方々からパンジーなどの苗を二万六千苗いただき、被災地の各地へ配る「花と緑のまちづくり」の最初の一歩がありました。この一宮市の角田さんの支援は第一回の「ガレキに花」にさかのぼります。第一回種蒔きの時、たまたま震災前から交流のあつた大阪の造園コンサルタントの辻本智子さんに連絡をし、鷹取での種蒔きにご参加いただきました。その時に長田区は区の花がサルビアだと聞いて、「この大国公園の花壇をサルビア花壇にしましようよ」と辻本さんから提案があり、九五年六月始め、たくさんのサルビアが角田ナーセリーさんから大国公園に贈られてきました。これがヒントで始まつた、一宮市の角田さんのネットワークからの花の苗配布は、九六年二月を第一回として今年（九九年三月）の春で七回を数えます（この七回に最初のサルビアは入つていません）。

毎回二万苗から三万苗の花苗を贈つてくださるのですが、最初は辻本さんが一人で段取りをしてくださり、愛会や住民の皆さんに運賃のカンパをお願いすることになりました。「お花はただですが、お花を持って行かれる方々、花一株につき一〇円を目安に、運送賃のカンパをお願いします」、そして「角田ナーセリーネットワークの皆さんへのお礼に、育つている様子を知らせるはがきや写真をだしてあげてください」と書いたチラシをその都度必ず渡しました。「花はただです」と、簡単にいいますが、みなさんがお花屋さんでだいたい百円から三百円くらいで買つておられるあの苗と思つてください。それはもちろん売値ですが、ほんとうに買つたら今まで（七回分）の累積はいくらになるのか、エライ金額だとおわかりいただけますはずです。

角田さん達のネットワークの方々にもほんとうにほんとうに頭が下がります。

ただ、花も生き物、生産業者の方としては一週間や二週間も前からいくつの苗をいつ出発できるというような悠長な話ではありません。本来の出荷を終えられ、これなら神戸に送れるぞとの最後の判断はほんの二、三日前です。しかも何軒かのネットワークのメンバーに呼びか

知県からのトラックの手配まで完璧でした。一言で“トラック”といつても花を運ぶのは特殊なトラックです。荷台は何段にも仕切り板で段組ができるようになつています。そこに四〇株ほどずつ入つたパレット状のカゴがぎっしり並ぶのです。一パレットずつ並べて積んでいき、一パレットずつ降ろしていきます。

「関西方面から東海方面に花を積んで出向いて行つたトラックで、大阪、神戸方面へ空っぽで帰つてくるトラックを捕まえるんです、しかもボランティアで運んでもらえることが条件です」とのこと。そんな神業（勝手な神業です）のノウハウを辻本さんから伝授いただき、九六年夏からは私が辻本流手配（この手配はヘタにやるとえらいことになります）をすることになりました。

花はただですが、運賃もただ。何と恐ろしいことをやつていたんだろうと今もつて思います。九七年の夏からはそれでも運賃だけは払うことにしてようということなつたのです。払うと言つてももちろん充分ではありませんが、花の苗はいまだにただのままです。まちづくり協議

けてのこと、揃いません。受ける方はとすると、配つてくださる各地の協議会のメンバーを確定しなくてはいけませんが、いくつ、いつ、が決まらないと連絡できません。協議会はそれぞれ役員の方が地域の住民に声をかけ、花を植える準備をしなくてはいけません。最終お知らせは毎回「明後日ごろ花の苗が届きます」に「もうちょっと早よう連絡してよ」の応酬でした。でもこればっかりは仕方ありません。なんせ、「なまもの」ですのです。

しかしお蔭様で、ほんとうに各地域で花が充分に復興を手伝つてくれました。最初はどこに植えたらえのや、というほど地面がなくて、仕方なくプランターに植えたり、庭の隅っこで可憐な花が健気に咲くのを地区の中で自慢しあつたり、と涙ぐましいことでしたが、ご近所同士で花談義が交わされ、コミュニケーション再生の一端をなつていきました。角田さんのネットワークの話はいっぱいあります、ありがとうございますと尽きせぬ感謝を込めて、ひとまず次へ。

はるかちゃんのひまわり／岡本交友会との出会い

加藤はるかちゃんという少女が岡本に住んでいました。

崩れ落ちた天井の下敷きになつて彼女は亡くなりました。はるかちゃんの隣の人が飼っていたオウムのえさのヒマワリが散乱し、夏のある日この敷地に見事な花を咲かせました。

岡本の住民で構成された『岡本交友会』のメンバーがこの種を収穫し、来年も咲かせたいと支援ネットワークに連絡がありました。九六年三月岡本の一角で約二〇ヶ所に二〇キロの種を蒔くことになりました。

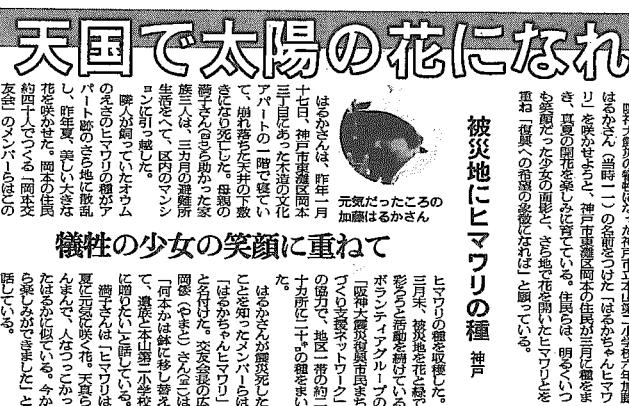
私達ははるかちゃんも親御さんもまったく存じませんでしたが、この種に願いを込めて蒔きました。おおきくなあれと親は子供に願いますが、この子はこの時から大きくなつたでしようか。天国で大きな花を咲かせたでしょうか。被災地岡本で大きな大きな花になりますようにと祈らずにはおれませんでした。

力の限りを尽くされ、広岡さん達と頑張つておられます。私達はなあーんの力にもなれませんが、この谷崎邸の跡地にヒマワリの種を蒔きたいとのことでした。たつみ先生の談によりますと「『谷崎はん』は向日葵が好きだった」ということです。種蒔きくらいは役に立ちそうです。

まずは岡本の住宅地図をもとに空地になつているところを調査しました。ここなら蒔ける、ここはどうやろか、と手分けをして歩きました。奇しくも種蒔き日は三月三一日と決めて結局五〇ヶ所くらいになりました。そのなかには山手幹線という道路沿いの歩道植栽に蒔くというのも入っています。あんまり空地ばかりでも能がないと、

道路を走る車の運転手さんにも見てもらおうということです。道路は夏がくると草引きや水まきに公用車が来ます。水はやつてもらつて助かるのですが、草引きの時にきっとと抜かれてしまうだらうけれどとは思いましたが、震災後やからそんな」とどころやないかもしけんとも思いい、とにかく種蒔きは実行しました。種蒔きというより、少し土を穿つて二〜三粒の種を入れ、土をかぶせるという方法です。

岡本交友会の広岡倭さんは岡本七丁目にある谷崎の家の復元活動を始められたところでした。谷崎の研究者として著名な武庫川女子大学教授のたつみ都志さん（友人ですが）が



(出典：『朝日新聞』1996.6.14)

ひまわりはその夏、真夏の太陽を一杯浴びて大きな花を開きました。天国のはるかちゃんに呼びかけるかのように見事に沿道を飾りました。谷崎邸跡もあちこちの空

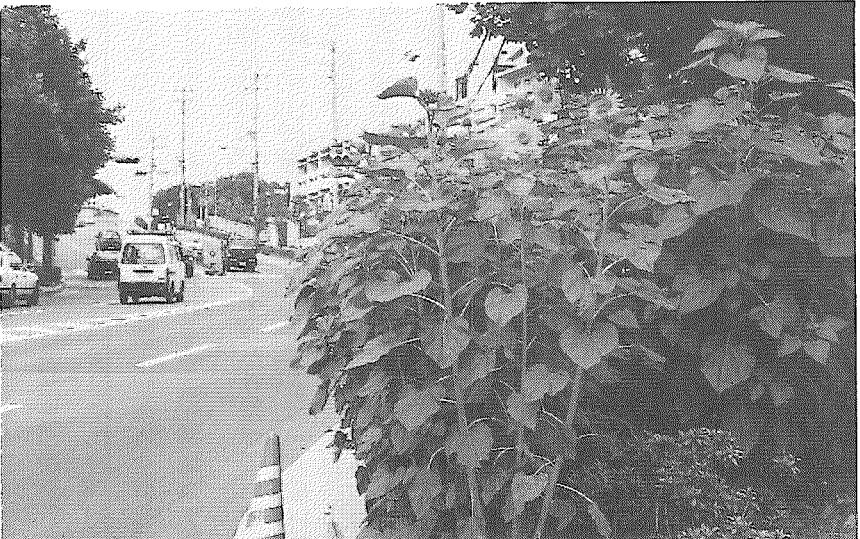
地にも大きなひまわりが咲きました。

すっかり枯れて夏も終わるころ私達は沿道の掃除をしました。ひまわりの枯れ枝を切つて種を拾い、根を抜いて土を落とし、また元の沿道植栽に戻しました。四月から五月、ひまわりの芽が出て育ち始めたころ行政の沿道の草引きで抜かれてしまうのではないかと心配しましたが、お水だけをちゃんとやつてください、一本も抜かずに大きくしてくださいました。その心意気に感謝してくれたヒマワリは私達で引き抜き、掃除をしたのです。沿道緑化のお仕事の皆さん、ありがとうございました。

このお掃除の時拾った種は、広岡さん達が一時保管してくださいり、次の春に住友銀行岡本支店にご来店のお客様にメッセージつきで配られました。また岡本付近のどこかでひまわりを見かけられたら、このひまわりを誰かが育ててくださったのだと思つてください。ドラム缶に保管されたヒマワリの種は、こんどこそ住民の手に委ねられました。岡本交友会にはもう残つていませんが、どこにあっても花はきっとまた夏の太陽をしつかり受け止めて大きな希望を担つてくれます。

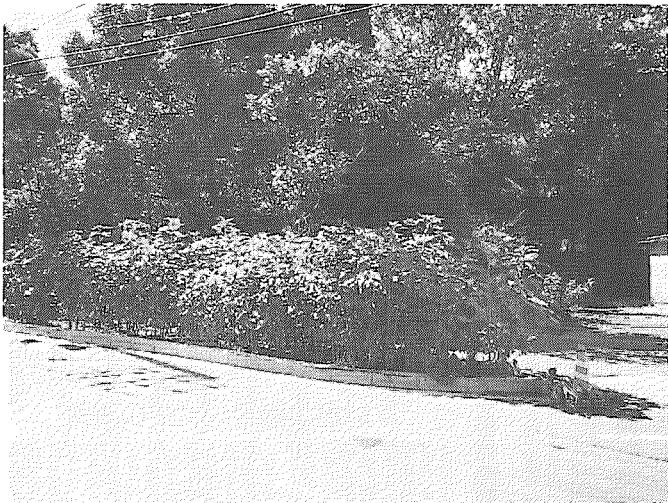


岡本地区のあちこちで、このようにすくっと立つヒマワリがしばらくは真夏の日々を彩りました



このヒマワリは道行く人や車の運転手さん達を和ませたでしょうか

実は、あのはるかちゃんのひまわりの種、鷹取のあのペチュニアの種と一緒にほんの少しだけ、今も私の手元に大切に残しております。



山手幹線道路沿い植栽帯に大きく育ったはるかちゃんヒマワリ

あれから四年が経ちました。

震災の年、私達の事務所の跡地にはコスモスが四ヶ月間咲き、くる日もくる日も水をやり、花を摘み、たくさんの人々に勇気と希望を与え、枯れました。鷹取のヒマワリも、東灘区の混合の花花も、精一杯の花を咲かせ、枯れました。収穫した種は、多くの人々に配りました。見に来ていた幼稚園の子供、近所の住民の方々、わざわざ花を見に立ち寄つて下さった方々などに、種を持つて行つてもらい、来年もその先も咲かせて下さいとお願いしました。

そしてそのあと、それらの場所の再建が始まりました。東灘区の魚崎小学校周辺で種を蒔いた場所がどうなつたか、四年前の種蒔きの時の写真を頼りに訪ねてみました。確かこのあたりだつたというところには立派な家が

ていましたと話してくださいました。

お家の玄関前は種を蒔いた時の花の種がずっと続いていて毎年花が咲くそうで、玄関横には一本の辛夷こぶしが植えられていました。その辛夷の木は『ひょうごグリーンネットの復興シンボルツリー』に応募してもらつたものでした。おつしやいました。

私は緑の取り組みが住民の中に生きている実感を持つ

建つていて驚きましたが、その建物のあちこちにはいろんな花が咲き乱れていました。ビルの一階西側にはちゃんとお花屋さんが入つて居られ、あのころ屋台のような設えでお花屋さんがあつたことを思い出しました。お店に入つて、「この花屋さんは震災直後におられた花屋さんですか」とお尋ねしたら、「そうです」と返事。表にでもう一度ビルを眺めていると、まだ整備の残つている一号線側の空地に、ボツンと屋台小屋が残つていて、竹田生花店と看板がありました。

同じ東灘区の国道二号線に『小路』という交差点があります。ここは奄美・沖縄からの桜が日本縦断桜駅伝とともに走つて来て受け渡しのあつた場所です。

元々は小路市場という東西に長い商店街があつた場所ですが、震災で倒壊してしまつたのです。その商店街の通路だつたところに種蒔きをしました。一回目の夏、通路だつただろうとわかる敷石沿いに可憐な花が咲きました。二回目も同じ場所に種蒔きはしましたが、その時は既に再建計画が決まつていたようでした。確かめませんでしたが、たぶん花を見る事なく工事になつたことと思います。この度現況の調査をしてすっかり立派な建物が

建ち並んでいて、まち並みもすっかり整つています。「阪神沿線にたしか酒屋さんがあつたはずや」と歩いていますと、酒屋さんはないけれど、プレハブの周りにビール瓶のケースが置いてある駐車スペースがあります。ぐるっと回つてみるとプレハブの入口に『永島酒店』の幟があり、中で立ち呑みのような空間が見え、覗いたら中から人がでて来られました。「すみません、ここは震災の時も酒屋さんでしたか。この写真はここでしようか」と尋ねますと、「ああーこれはここです。なつかしいねえ。ここに花の種を蒔いてもらつたんです」「ああ、ここでしたか、その時種を蒔いた者です。お久しぶりでした」。永島さんはお家は再建されたのですが、酒屋さんの方は後継者もないし、このごろはスーパーやコンビニエンスストアでお酒を売つてるし、もうこのままでいいかと思つ

でも全てそんなことではありません。芦屋市で種蒔きをした中に、お家の門構えと玄関までの石を敷き詰めた所だけが残されている空地がありました。当時は周囲もすっかり空地で暑くてからんとした風景の中で、コスモスが夏の陽差しの中で揺れていたのを思い出しながら今

回訪ねてみますと、周りはポツンポツンと建ちかけている中で、そこだけ全く当時のままに門と敷石だけがあり、雑草が生い茂っていました。そこは区画整理事業区域内でした。

もう一ヵ所別の区画整理事業区域で、種蒔きをしたところがどうなつているか見に行きました。大きなお庭があるお家でした。ここでの種蒔きは五月と一月の二度、一度目の夏はコスモスが咲き、二度目の春は前年のこぼれ種のコスモスとの年のボピーが咲きました。前に書いた故高橋さんが楽しみにしておられ、結局見ることができなかつたあのボピーです。当时空地になつてしまつた広大な敷地の中に、植木を大事に全部残されていると建でおられ、「うちは減歩はあるけど同じところに建てるから、こうやって小屋に家財道具を入れてんねん」という印象をうけましたし、道路沿いにはプレハブ小屋を話をよくしていただきました。それが今回訪ねてみますと、区画整理事業が始まってまつたく景色が変わつていました。道路が出来ているところがあつたり、空地だつ

災で壊れていなかつたお隣の家も新しい道路の都合で一時立ち退かねばならず、せつかく残つた家なのに壊されたのだそうです。

住市総（住宅市街地整備総合支援事業）の公的補助を受けた共同建替として、九六年春に宮脇檀さんに設計をお願いして、私達の事務所も建つことになりました（といつても建てるのは大家さんですが）。

震災直後、その建替の相談をはじめてお願いして、東京から宮脇さんに来ていただくことになつた時、宮脇さんは「君達は毎日何を食べているのだ」と聞かれました。「ガスがないので、おにぎりやパンを主食に、インスタントのラーメン、うどんであつたまります」「何をしとるんや、そんなもんで仕事（復興）ができるか」と活を入れられました。

「そちらで用意できるものはして、ないものは東京から持つていくから」と、東京からどんどんファクシミリが来ます。結局、私の家からバター、まな板、フライパンを持参し、東京からはガスボンベ、簡易型コンロ、皿・フォーク・ナイフ・ワインカップ（すべてプラスティック

た所は区画ができて分譲地のようになつていて、トラックやブルドーザーがあちこち掘り返しています。お花のお世話をよくしてくださつた隣の家もなく、記憶を頼りに歩いていると、見覚えのあるプレハブ小屋がありました。たまたま住んでおられた方がいらっしゃつて久しくに育てていただいた方です。「庭が新しい道路で分断され、せつかく残してある植木達は残念ながら植え替えられないで涙を呞んで、家が建つたら庭も新しい木々にできなかつたあのボピーです。当時空地になつてしまつた広大な敷地の中に、植木を大事に全部残されていると建でおられ、「うちは減歩はあるけど同じところに建てられるから、こうやって小屋に家財道具を入れてんねん」という印象をうけましたし、道路沿いにはプレハブ小屋を話をよくしていただきました。それが今回訪ねてみますと、区画整理事業が始まってまつたく景色が変わつていました。道路が出来ているところがあつたり、空地だつとも」と言うと、陰で文句だけはたらふく言うてるけどね。私のこの小屋もちょっとだけ道に係るようになるんよ。私たちには逆らえへんから、『ははあごもつ付かへんし、だんだん腹立つてくるわ。自分の場所が決まるから早よおどけなさい言われて、今片付けてるけど片付かへんし、だんだん腹立つてくるわ。自分の場所が決まってそこへ家建ててこの小屋の荷物をそつちへ入れて、小屋を壊したかったのにねえ。腹立つけどお上には逆らえん、しゃーないわ』と夕焼けになつた空を見上げて「もうこんな時間や」と本当に腹立たしいようでした。震

クだとご本人は嘆いておられましたが、今も大切に置いてあります）、ワイン、そしてイタリア料理の材料一式二人分、調味料一式、そしてインスタントエスプレッソ、デザートのケーキまで揃えて、使い込まれたご自分の包丁（晒しには巻いてなかつたですが）と年季もののソースパン（これは記念にと下さいました。コー・プランの厨房の宝物です）、小型のまな板、ボールにザル、ナップキン類やエプロンを持って二月一八日土曜日、交通のマヒした被災地へとわざわざ来てくださいました。

交通が遮断されたままでしたから、JR住吉駅から大きな荷物を三人がかりで引きずるようにして歩いてやつとのこと、楠丘にたどり着いたという感でしたが、気持ちは高ぶつておられ、早速現地の様子を小林が説明し、周辺見学へとカメラを持つて歩いて行かれました（その時のことを見て東京建築士会の会報誌『建築東京』（九五年五月号）に書いておられます。今読んでも涙がでるのは、文章力のせいだけではないと思います）。

次の日、近所の方々にも集まつてもらつて建替の相談をしました。

廃墟の椅子たち

所員一人と、大阪で微発したその友人との3人の両手全部とカート2台分の荷物。簡易ガスレンジ2台、ボンベ5本、皿とナイフ・フォーク、グラス類1ダース、ワイン4本、ホールトマト缶詰3缶、スペゲッティ3袋から始まって、じゃがいも、ピーマン、しいたけ、玉ねぎ、にんにく、チーズ、インスタントエスプレッソ、食後のケーキ、ナイフ、包丁、まな板、ステンレスボールと籠、ナップキン、エプロン、オリーブオイル、エクストラヴァージン、塩・胡椒、赤とうがらしetc、要するに破壊してしまった仲間の事務所で飯を作るための全セットを引きずりながら、私達は廃墟・神戸の道を行く。

あの地震から1ヶ月、友人の都市計画事務所は、所員全員一日も休んでいない。自身も倒壊してしまった木造事務所脇の残ったRC部分に、自分たちで電柱から電気と電話を引っ張り込んで、被害状況の調査と復興計画に没頭しているのである。それも毎日発泡スチロールのカップでおにぎりやサンドイッチ、インスタントうどん食いながらというから私は怒った。そんなもの食いながらで良い計画ができるか。ちゃんと食事、ちゃんと日常、ちゃんと仕事—とは私の信条。

マフィアのママは闘争中黙々とパスタをゆで続けて、彼らを抗争の町に送り出したというではないか。私がママに行く!と。ボランティアの飯をボランティアするボランティアだってあるはず。

1000人のボランティアの学生たちと作ったと言う巨大な神戸全市の全建物被害状況図が貼られた前の大テーブルの上に、地図と資料が散乱し、資料作り、かかってくる電話、ファックス、絶えず出入りする人たち、話し声でまるで最前線の戦闘指揮所みたいな気配を聞きながら、私は持参のプロ用エプロンつけてアンティーパスタからパスタ、肉料理、ドルチェ、デザートに至るフルコースのイタリア料理を黙もくと作る。12人前である。

久しぶりの食事らしい食事だと喜ぶ彼らの声を聞きながら、私は周辺の見渡すかぎり展開する廃墟・神戸の風景を頭から拭い去ることができないでいた。

阪神高速の橋脚はもう殆ど撤去されていた。JRの高架は鉄板で巻かれて間にコンクリートを打ち込んで遮二無二再開を目指して補強されている。

(出典:『建築東京』1995.5号)

セイタ・ハレの木

73

クラッシュしているビル、剪断破壊された事務所ビル、これらの被害も無残で心が痛むが、圧倒的に多い戸建の住宅の崩壊しているのを見るのは10倍も胸が痛む。

道いっぱいに倒れ込んでいる家、瓦以外は全て瓦礫になってしまった家、半分崩れてしまった断面部分から布団や毛布のピンクや青の生きしい色がこぼれ出しているなど、ドキッとするほど生きしい。

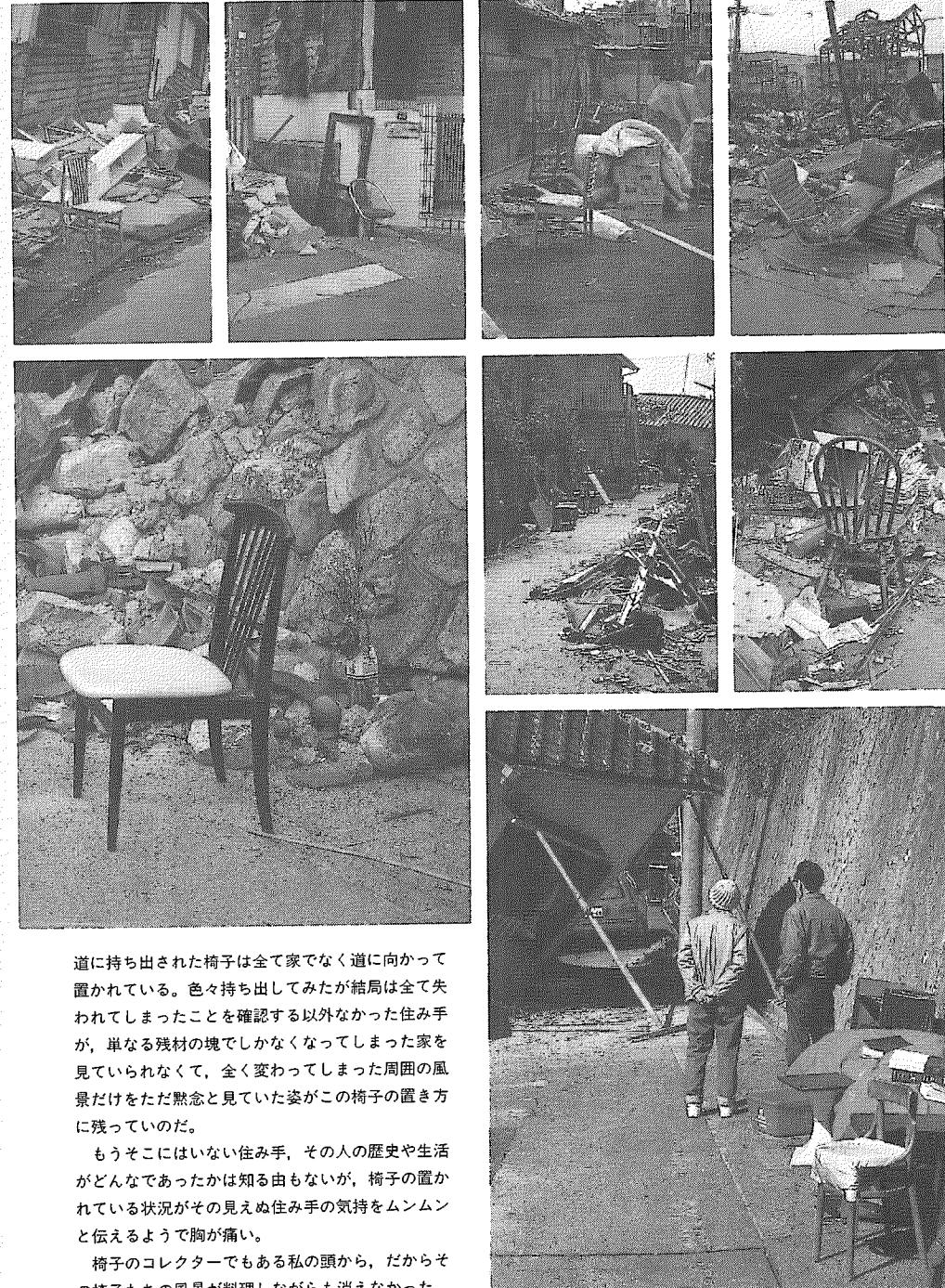
焼き尽くされてしまった跡から、家族が丹念に拾い上げ、一枚の畳のうえに広げられた壺や茶碗、皿などなどがあったりする。拾い上げた人の拾い上げている気持が迫まってくる。

仕事柄、人がその家にどれくらい怨念を注ぎ込むか知り抜いている。その怨念の固まりともいべき家が、自分と関係ない力で突然崩壊してしまったのだ。作った怨念と壊れてしまった怨念とが二重になって、廃墟になった家から放射されてくる。それが私の心を締め付ける。

そんな廃墟のなかで、ふと気が付くと妙に道路脇の椅子が目立つ。全てが崩れ去り、使えそうなものが道に引きだされているのだが、何軒に1軒か必ず崩れ去った瓦礫の山の脇に椅子が置かれている。

椅子は構造的に安定しているから、あの地震でも室内にそのままの残ったのだろう。家財を崩れさせた家から引き出すときに、そのままで残った椅子はかつてあった生活を思い出す糧になったのだろうか色々な椅子があった。剣持さんの天童木工製の椅子が何の変形もなく焼け跡に静かに残っているのを見たときは、思わず走りよりたい気分だったし、シェーカー風のワインザーチェアがお屋敷風の焼け跡の隣の外に持ち出されているのを見たときは、住み手はどんな人だったかと心が痛んだ。

そしてその椅子たちに共通すること。残がいの脇



道に持ち出された椅子は全て家でなく道に向かって置かれている。色々持ち出してみたが結局は全て失われてしまったことを確認する以外なかった住み手が、単なる残材の塊でしかなくなってしまった家を見てられないなくて、全く変わってしまった周囲の風景だけをただ黙念と見ていた姿がこの椅子の置き方に残っていのだ。

もうそこにはいない住み手、その人の歴史や生活がどんなであったかは知る由もないが、椅子の置かれている状況がその見えぬ住み手の気持をムンムンと伝えるようで胸が痛い。

椅子のコレクターでもある私の頭から、だからその椅子たちの風景が料理しながらも消えなかつた。

ガレキに花を咲かせましょう

私にとって、長い間コスモスは夏の花だった。

50年前、終戦のあの暑い月。零戦を作っていた中島航空機があった名古屋は、徹底した絨毯爆撃を受けた。岐阜に一人で学童疎開させられていた私が二ヶ月に一度ほど帰る度に、どういう訳だか名古屋の大空襲があるのだ。20年のある大空襲の日、長い爆弾攻撃の後、突然夜空一面が明るくなった。今にして思えば照明弾だったのだが、何もわからない私たちは防空壕から飛び出して空を仰ぐばかり。そこへ今度は鋭い落下音と共に無数の焼夷弾が落下され始めた。わが家の庭に高射砲の弾片の落ちるヒュルヒュルという音に混じって、至るところに焼夷弾が落ち家が燃える音が響く。家の棟木や梁の焼け落ちるバリバリという激しい音。

夜空は真っ黒で、その中を地上の炎を銀色の機体の下部に真っ赤に映してB-29の編隊が思いがけぬ低さで過ぎていく。やがて夜が明けるのだが、今度は燃え盛る火事の煙で空一面は灰色。その走るように流れるどす黒い煙の中を真っ赤な太陽が、巨大なポールのように見えた。私が見た限りの最も大きく最も赤い太陽だった。

翌日火事が納まって、防空壕から出た私たちが見たものは、見渡すかぎり灰色一色の焼け跡と、そこから立ち上る同じように黒い煙だった。電柱が黒く焼けただれ黒い電線を引きずるようにして立っている家の焼け跡に、灰色の基礎と台所の流出しの流しが突き出している以外、見渡すかぎり何もなかった。景色は無彩色だった。色彩らしい色彩はひとつもないその灰色の風景のなかに、そこだけ輝くばかりの原色を見せていたのが、何軒か先の家の庭に咲いていたコスモスの花だった記憶がある。株は異常に大きくスックと灰色の空にまで伸び、赤、黄、オレンジと、花は信じられないほど密集して咲いていた。

灰色の焼け跡の無残さと、そこに咲いていた戦争中、唯一とも言うべき原色の鮮やかさとの対比から、私の記憶にはコスマスは終戦、8月の花だと刻み込まれていた。それが最近、俳句をしている友人からコスマスは秋桜、季語は秋・9月だといわれて想い返してみるのだが、こういう記憶は印象の強かったものが複合されて刷り込まれてしまうことが多いという。たぶん、8月の空襲と敗戦、そして9月の焼

也大可心様

77

け落ちた廃墟の中に咲く花という、終戦前後のいろいろな記憶が錯綜していたのらしいと思い返す。

それにしても、廃墟の中のコスマスというのは、少年時代の私の一つの原風景、それをその50年後阪神大震災で廃墟になった神戸に再現しているグループがいるというのだが、私としては行かない訳にはいかないではありませんか。奈良合宿の学生研修の一日を抜け出して神戸に向かう。

震災から6ヶ月。三の宮周辺の被災ビルは周囲をすっかり囲って、なかで取り壊した瓦礫を下に落としている音を聞かない限りちょっと被災地とは見えない風景。と思ったらあの拙屈した市役所旧庁舎は割れたガラスも生々しくそのまま。被害の跡の一部を冷凍保存して、後世への資料にしたらという林昌二氏の提案で言うと、この建物など絶好の資料ではないか。大手がしゃかりきになって被害建物をアツツという間に取り壊してしまったのは、一種に証拠隠滅だという声がある時もあるし。

まだ斜めに傾いた建物が残る道をあの焼失してしまった長田地区へ。一般に知られている観光地神戸とはもともと異なったこの地区全体の雰囲気の中で焼け跡はキレイサッパリと瓦礫が取り除かれ、あちこちに建つプレファブの商店とその周辺に林立する樹だけが正堂でない雰囲気を運んでいた。

さて「ガレキに花を」と馴熟洒落をやっていたのは以前この欄で書いた私がマンをやってイタリア料理を作りにいった都市計画コンサルのコーブラン。死んでしまった私の友人、水谷顕介の教え子たちのグループである。

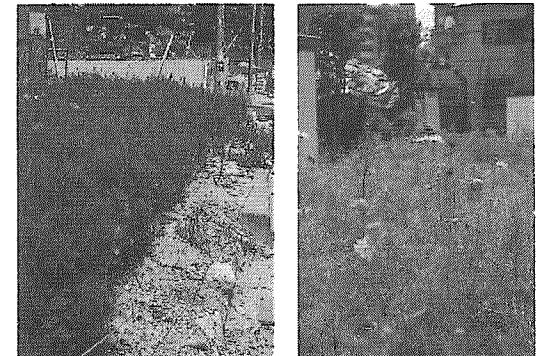
倒壊してしまった彼らの旧事務所跡、そして周辺の隣人たちの廃墟、了解を得られたいいくつかの地域の焼け跡、取り壊された家の敷地（中には不法侵入して植えてしまったのもあるとか）に、彼らとその



止まつたままの時計の神戸市役所



▲長田地区の廃墟はすっかり整理されて



ガレキに咲き始めたコスモス



仲間がせっせとコスモスを植えていて、梅雨明けの8月の
暑さの中で咲き始めているのだ。

戦争の焼け跡ではなく、ブルで整地され解体された尾根だから灰色ではない。けれど、赤堀基盤や土間コンが残された茶色の土はやはり廃墟であり、名古屋の9月の練達さに比べればまだかすかに咲き始めたばかりのコスモスほど、やかではあるが美しかった。そして、終戦時のコスモスのように、この花のイメージはどれだけ多くの人に優しい気持ちを、安らぎを与えてくれるか。私はそれを知っているだけに、彼らは無くつた。こういう弟子を育てた水谷よ、お前さんは偉かったねと思わざる得なかった。こういう形で旗揚を授けることと私達の仕事なのだが、それを教えてくれたコーフラン、有難う。

このころは、みんな不安は抱え切れないほど持っていました。

ましたが、夢を持ち再建を考えておられたころです。せつかくならみんなで協力して共同建替ができたらしいのにという話を宮脇さんを囲み、小林が説明をしてお昼飯を食べながら（この昼飯はサンドヰッチやホットドッグでした）、狭いサロンで近所同士頭をくつつけながら話し合いました。でも結局は借地の問題があり、共同建替としては最終的に二軒での実施にしかなりませんでした。しかたがありませんでした。

この日、マフィアのママは「マンジャーレ！」と叫び（69頁参照）、私達はまた復興という戦闘に挑めたのです。数軒での共同建替はかないませんでしたが、私達は宮脇さんが来てくださった二日間で生きる勇気が再び生まれました。「毎日、毎食いつもきちんと食べて、よい仕事をしよう」と言ってくださったあの言葉が、それ以後ずっと私の頭の中になります。くじけそうになつたり、邪魔くさくなりかけた時にはきまつて宮脇さんのあの言葉に励まされて、日常のことをきちんとしないと何もできないのだということをしっかりと心に刻んでいました

ました。

宮脇さんはこの共同建替の完成寸前に病に倒れられ、竣工には立ち会つていただけませんでした。何度も入退院を繰り返され九八年五月、やつとこの建物を見に来て下さいました。咽頭癌の手術で声帯をとられていましたので、お話しは筆談でした。大好きだったお肉を私達が焼いて料理をし、屋上庭園で採れた野菜（ブロッコリー やカリフラワー、レタスなど）を使って宮脇さんがシーザースサラダを作つて下さいました。一緒に共同建替はできなかつたけれど、西隣の嘉村さんも交えてみんなと一緒に楽しむ一時でした。

それから宮脇さんは私達のコスモスのことも『建築東京』（九五年九月号）に書いてくださいました。その中で最後に宮脇さんが呼びかける「水谷よ、お前さんは偉かつたねと思わざるを得なかつた。こういう形で環境を提案することも私達の仕事なのだ」のくだりは、いつも語りかけたい友人を亡くしてしまつた心の叫びのように私は思えます。残念ながら水谷先生も宮脇先生も、もうこの世にいらつしゃいません。なによりこの建物を建て



私達が事務所としてお借りしていた住宅の倒壊を免れた建物（鉄筋でC棟と呼んでいます）と全壊してしまった跡地に置いたプレファブ（サティアンと呼んでいました）。コスモスは7月から10月まで咲き続け第一園芸さんの言葉どおり11月には枯れました

ていたいだしたこと、そしてここが私達の仕事場であることを誇りに思っています。私は、再建されたこの建物で

仕事をしながら、「ここで仲間が、後輩が、地元の住民の方々がまちづくりを語っていますよ」ともう決して答えてはくださらぬ水谷先生や宮脇先生にいつも語り伝え

ているつもりです。

瓦礫から家々の建設への過程の第一歩として、荒れ地を花畠にしました。

そこはしつかり花が咲いて、枯れました。

しかしそのあと、そこには大きな希望が咲きました。

10 ちょっと、マスコミのこと

阪神大震災は、私にとつて非常に多くのことを学ぶ機会となりました。

自分自身のこととしては、日常生活の基本的なことはびっくりするほど無駄なことが多かつたといまだに反省しきりです。前の章でも書きましたが、食生活もできるだけきちんと、はしょらすにという心掛けを持ち続けたいと思っています。自分だけでは何もできないことや、自分には全く関係のない人々との交流のことでもこの震災が教えてくれたことでもあります。

そのなかでもマスコミの人達との出会いは、私にとっては震災がなければ絶対になかったことの一つと言えるでしょう。

震災直後からものすごい数のマスコミ関係者が私達ネットワークのところへ来られました。「ガレキに花を」から少しはずれることになりますが、なつかしい取材のこと

とをちょっと思い出しました。

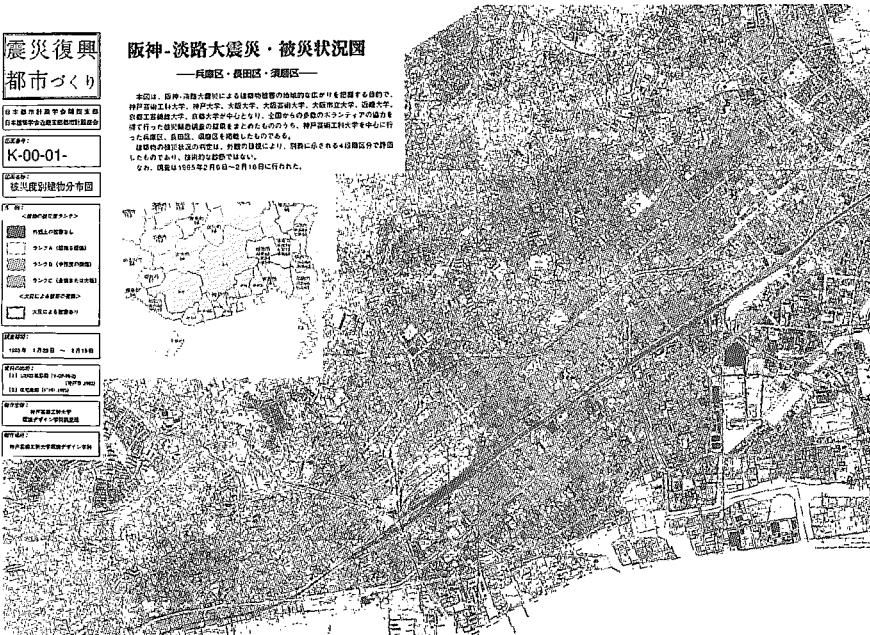
どなたが一番ということではありませんので、私の震災直後のメモノートを古い順から繰ってみますと、一月二九日には朝日新聞仙台支局大和田建太郎さんが来られています。

その日は、建築学会と都市計画学会の合同調査で震災による建物被害の実態調査をどうしようかという内密の会議が我が社C棟の狭いサロンであつた日ですが、なぜか大和田さんはその席におられました。

被災概況地図は、すでに神戸市や大阪ガスが概要図や被害調査図を作つて（詳しくはわかりませんが）おられたはずですし、神戸大学の土木系教室の高田先生と沖村先生の研究室を中心に土木建築構造物の被害調査を始めおられました。しかし、たのみの国土地理院の被災状



この会議が震災復興の全ての始まりでした



被災状況図—兵庫区・長田区・須磨区

況図も神戸大土木の地図も市街地全域の状況把握にはなつていないと、いうことで、前記の合同調査をどうしようかという内密会議となつたのです（詳しくは日本建築学会編『阪神・淡路大震災調査報告書・建築編第一〇編都市計画』の第四章まちづくり活動と復旧・復興の活動／小林郁雄、参照）。

一月二九日の午後三時、灘区のコンクリート三階建ての倒壊しなかつた我が事務所の狭いサロノに、東京の都市計画学会から、高見澤邦郎さん、吉川仁さん、そして大和田建太郎さん（そうです彼は学会員なのです）の三人、鳴海先生、土井先生、安田先生、室崎先生、三輪先生、丸茂先生、齋木先生、田中先生、児玉先生、小浦さん、井口さん、佐々木さん、長嶋さん、後藤さん、鳥田さん、中嶋さん、三木さん、堀口さん、間野さん、宮崎さんら都市計画学会・建築学会・造園学会などの関係者、民間都市計画プランナー、行政マンも含めて二六人で、緊急現況調査実施方針の打合せが行われたのです。

木造の倒壊した我が事務所の解体が一月二六日から始まつており、連日すごい埃のなかで、一月二三日に自力

で繋いだ電話が引っ切りなしに掛かつてくるという状況でした。私は毎日電話の対応に明け暮れ電話機のある場所から一步も動けず、被災地の様子がどうなつていてるのかは、自宅と事務所の周辺しかまだ知らないころでした。一月三〇日の朝も大和田さんは仙台から持つて来られた折り畳み式の自転車で我が社に来られ、「どこへ行つたらいいかなあ、やっぱり真野かなあ、真野はどう行つたらしいの」と私の机の周りでうろうろしておられました。私はここ数日の埃と電話攻めに声が出なくなつてゐるけれど電話には出ないといけない苛立しさに少々参つてゐるところだつたのでしよう。「なぜそんなにみんな真野真野とおっしゃるんですか、被災したのは真野だけではありません。新在家も魚崎も鷹取も淡路島だつて震源地でしょう。淡路島から尼崎まで全域ご自分の自転車で廻られたらどうですか」と声をかぎりに怒鳴つてしまいました。前にも書きましたが、『無謀の天川』もですが、『怒りの天川』でもあります。大和田さんはそれでも辛抱強くというか、しつこくというか、どこへ行くかの情報を仕入れようと必死でした。そして彼は鷹取の大國公園と

瓦礫の街のオアシス

大和田建太郎

緊急震災特集◎自治体に何ができるか

ルポ

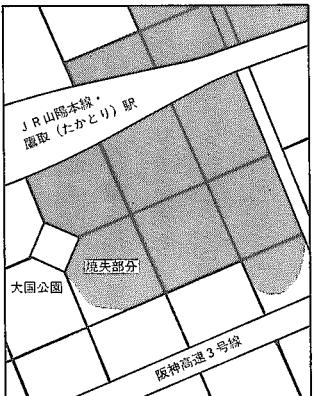
大震災から一ヶ月ほど後の新聞に、国土地理院が上空から撮影した神戸市長田区、JR鷹取駅周辺のカラー写真が載つてた。駅の南口に出て東寄りに一〇〇メートルほど歩いた地点に、大國（だいこく）公園がある。

一五〇〇平方メートルの公園を挟んで、東側に焼け跡が広がつているが、西側はほとんど焼けていない。それが上空写真から餘り鮮やかに見て取れる。
震災から一〇日後に訪ねた地区だ。悲劇のどん底にありながら、「公園は地域のシンボルですよ」と、愛着を込めて語ってくれた人びとの表情がよみがえつてくる。猛烈な火の手は、この公園で阻止された。地震当日、東から紅蓮の炎を吹き付けていた風が、正午近くになつて、その勢いを弱めたという事情もある。だが、なによりも、ここに避難した周辺住民たちがバ

●コミ

ケツや消火器で、炎に懸命に立ち向かうことになかつたなら、周辺の町並みはことごとく炎上していただに違ひない。

豊かな緑に覆われた公園は、大都市、とりわけ密集地の内壁だといわれる。大國公園は、けだが、オープンスペースとしての役割のかのようである。



（出典：『月刊自治研』
1995.3号、自治研中央推進委員会）



出会われました。彼の粘り勝ちということです。

それ以来今もずっと大和田さんとの交流は続いています。もちろん「ガレキに花を」も「茶店きんもくせい」も取材をしてくださり、多くのカンパもいただきました。でもそれよりなにより私が嬉しい思いますのは、「鷹取大公園公園に出会えたこと」を大和田さんが喜んでくださったことです。「被災地は一つだけじゃありません」と思わず私が叫んだのは、「阪神間の三百万人みんな同じ被災者です」と、私はずーっと思つて来ましたから、自分の足で探してほしい、自分の目で被災地の実態を取材してください、ということだったのです。

大和田さんの取材に同行されていた朝日新聞社のカメラマン後藤正さんも忘れられない人の一人です。六甲アーランドにお住まいだったのでよく立ち寄つてくださり、みんなでコーヒータイムを一緒にしました。花も好きでよく写真を撮つてくださいました。何と言つても忘れられないのは、鷹取を空撮すると大和田さんがヘリコプターを飛ばされた時に写真を撮られたのが後藤さんで、私はヒマワリが咲いたところを撮つてほしいとお願いした

に勉強されたのに被災地の生の状況を真っすぐに伝え、上司の見解を覆せなかつたのかと私は非常に残念に思いました。この時の勉強がその後少しでも彼自身の肥やしになつていることを、今は祈っています。

こんなことがあつたからといってＮＨＫを目の敵にしてゐるわけではありません。「ガレキに花を」を取材してくださつた当時ＮＨＫの神戸放送局のカメラマン、馬嶋順也さんの最初の取材は、九五五年九月だつたと思います。コスモスが揺れているなかで水やりをしている映像で、ニュースのなかのひとコマといふことだつたと思います。馬嶋さん自身のナレーションと字幕で被災地での活動のコメントでした。「ガレキに花を」の活動に賛同してくださいって、長い時間いろんな話をしました。その後も時々連絡があり、九六年春の阪神グリーンネット最初の仕事となつた愛知県一宮市角田ナーセリーネットワークからパンジー二万六千株が届いた時の取材も彼が自らカメラを廻されました。この日は春には稀な豪雨でした。三田市の「人と自然の博物館」隣の敷地に届けられたパンジーなどで、突風と土砂降りの春の嵐のなか「ガレキに花

のですが、ヘリからでは遠すぎて写らざがつかりしました。しかし、後藤さんがそれは見事な花の写真を撮つてくださいました。さすがカメラマン。

ちよくちよく顔を見せてくださつていたのがある時から姿を見せてくださらなくなりました。どうされたのかと心配していましたら、日曜版の撮影で長い海外出張でした。それ以後残念ながらお会いしていません。

二月三日にＮＨＫ大阪放送局文化部というところの池田謙二さんが、ＥＴＶ特集の取材で我が社に来られました。二月二〇日と二一日の二日連続、しかも一二チャンネルで八時から八時四五分のゴールデンタイムの放送です。放送日も内容も決まつていて、彼は夜遅くまでここと神戸大学の室崎先生のところで、一生懸命勉強されました。でも勉強の成果を彼の上司はまったく認めず、目茶苦茶忙しいなか、時間を割いて対応した我がネットワークや室崎先生の努力も報われず、後味の悪い「ＮＨＫ」になつてしましました。番組は森南地区を取り上げ、行政のやり方を一方的に批判するものでした。その後池田さんはどうされたか全く知りませんが、彼自身あんな

を」と花文字を描きました。そのあと桜駅伝のことや岡本のヒマワリなども彼がちょっとやらせ（業界用語では仕込みというそうですが）の演出をし、放送されました。九年春、久しぶりに電話があり、「神戸の桜で人々の心の桜になつてゐるところを教えてください。あんまりみんなが知らない所がいいんですけど。有名でないけれど地元の人達の自慢の桜というのではないですか」ということでした。六甲山の県道唐櫃灘線と表六甲ドライブウェイの別れる新六甲大橋のたもとに大きな山桜があります。六甲山の北側に住んでいる人や南から避難していく人達が朝夕必ず通る道で、しかもまだ住まいが決まらないで仕事をして南側のわが家に帰る人などいろいろな思いをいだいて通つていたころでしたので「自慢ということではないですが、こここの桜を見てほおーと一息」というのはどうかしらと提案したことがありました。彼は早速見に行かれたようですが、車がどんどん走つてゐるし、桜のすぐ上の六甲堰堤が工事中であんまり感動しなかつた

なりました。彼とはブータンや中国に行く約束もしていましたが、ちょうど県知事の選挙に重なつたり（中国へは私達もいまだ行けずにいます）してそれも適いませんでした。そして去年転勤で松山に行つてしましました。

最近N H K の朝のニュース番組で一度、彼の松山での取材の映像とナレーションを耳にしました。私達にとってはなつかしい声でした。

N H K はラジオの番組で「ガレキに花を」を最初に取材してくださいった橋高邦子さんも忘れられない人です。彼女は神戸っ子で元気一杯のひとでした。関西弁で約一五分ほどの番組だったと思いますが、コスモス畠の様子をうまく伝えてくださいました。スタジオと現地を結ぶやり取りをする手筈でしたが、ショッパンに『秋桜』の歌を唄われ（ラジオでいきなり唄われるだけあってさすが上手でした）、現地の一人舞台でスタジオ登場なしの取材になつてしましました。事前に下打ち合わせをして、ご近所の人も交えて話を進めたいとのことでしたが、このころ近所の住民は居らず、仕方なく事務所にいる者達と隣の印刷屋さんの親子で役割（これもれつきとした

ました。この映像をご覧になつた方、ちょっとやらせですが、ごめんなさい。

その後四方田さんはN H K を辞められ、御影に会社を創られましたが、東灘区の西と灘区の東で緩やかなご近所付き合いが続いています。

まだいろいろありますが、朝日新聞論説委員の政井孝道さん（当時は東京在籍）は九五年一月の終わりごろの夕方遅くに取材に来られましたが、あいにく小林が不在で中井君と私がしばらくお話ししさせていただいたと思います。わけのわからないころでしたので、ちゃんと応対できたのかどうかわかりません。それよりなにより、私が驚いたのは、小林が帰ってきてから取材は長時間続きましたが、大阪から乗つて来られたというタクシーがずっと待つていたことでした。こんなことはこれまで全く知り得ないのことでした。その当時は当然交通手段はなかつたのですが、その後電車が再開してからも、いろんなマスコミの方が来られましたが、だいたい大阪からのタクシーがずっと待つて居るのであります。すぐに帰つて記事にされるということではなくても、そういうことらしいので

やらせでしょう）を賄いました。一人は近所の主婦の役、一人は近所に住む学生の役ということで橋高さんの質問に答えました。もう時効ですね。聴取者の皆様ごめんなさい。彼女とはそれ以後も交流があります。

一番最近の「ガレキに花を」を取材して下さった四方田さんは、一宮市からの花苗配布と地域のコミュニティの取材でした。実はこの取材の日、角田ナーセリーネットワークの花苗配布は終わつた後でした。もう終わつたといふのに彼はご自分で何処からか花苗を買って来られ、「これをお配りどころを撮りたい」とおっしゃいます。「やらせばいやや」と云ひますと、「これはやらせではなく仕込みと云います」と涼しい顔。思わず笑つてしまいました。

震災前から我が社の前の道（キンモクセイ通りと小林が名付けた道）の街角緑花の師匠ともいえる沈さんを撮つてもらいました。沈さんと私達ネットワークのメンバーが立ち話をするシーンとか、茶店きんもくせいのなかで『老松・花と緑の委員会』の設立の会合をしている風景や、花苗を寿公園の街角花壇に植える様子を撮影されました。

す。手持ち無沙汰の運転手さんに夏は冷たいお茶を、寒い日は暖かいお茶を出したりしました。

たいしたことではありませんが、一度“フライデー”されたこともあります。というと何を追つかけられたのかと思われるでしょうが、追つかけられたのです。九五年一二月に長田の鷹取地区に咲いている花をフライデーが取材され、現地の人に話を聞かれたところ詳しいことは“ガレキババア”に聞けということになつたようです。私は我が社の会計士の高橋さんのところへ経理の相談を行つて居る時だったので、それは名古屋なのであります。フライデーの人は名古屋まで電話を掛けて来られ、電話取材になつたというわけですが「そんなにせんでもええのに」と思わず苦笑でした。

マスコミの話はもつともつとあります。きりがありませんし、本題とかけ離れてしまつてますのでまた別の機会にしたいと思います。

書き尽くせぬ心に残つてのこと

一九九五年の夏、私達の事務所の跡地に咲いたコスモスは、一心不乱に咲くという咲き方をしていました。

ゴロゴロとした地面の石を持ち上げるかのように芽が出て、それが日に日に大きくなつていく様子を、毎日大の大人達が喜々として見つめていたあの夏の日を、わずか四年前のことなのに、はやなつかしいと思つています。

いろんなことがありました。

前代未聞といわれた阪神・淡路大震災の揺れは、日本一の住宅地を襲い、ことごとく美しい暮らしぶりを壊してしまいました。でも私達はどんなに大変でも、声をかけ合う心強さや気遣う優しさを学びました。住宅が建ち、街が再興され、気が付くとプレハブだらけの何とも奇妙な家並みに、かなり違和感はあります。それでも何事がなくとも百年経てば、こうなつていたかも知れないの

です。私達が百年生き続けて見定められないだけです。

あんなに美しかった住宅地がすっかり様変わりしたのは残念ではありますが、それはそれ。今建つてしまつた家々は、「どうするこうする」ではなく、私は人の暮らしづを優先したいと思いました。なんともお粗末なまち並みになるか、いろんな知恵と工夫で美しいまち並みに整えられるかは住民次第です。専門家が持てる情報を駆使して住民とともに再びみんなが憧れる住宅地を作ることです。そして百年後に私達の子孫が誇りを持つて「我が街」と言える住宅地になればなあと願っています。

震災直後、宮脇さんにお願いして我が社の周りの共同建替の相談をしたところ、私はそれまで考えても見なかつた、人々の暮らしが生きざまにいろんなドラマがありま

した。

この本のなかに書けなかつたことで、私達を助けてくれたことがまだまといっぱいあります。

○出石町から長いことお借りしたテントのこと

壊れてしまつた事務所の建物を大林組神戸支店にお願いして解体撤去していただくことになつたのは一月二四日でした。翌二五日の夕方大きな解体機（私達はカッタ君と呼んでいた）が来て二六日から三一日まで約一週間で我が社は広場になりました。それはすごい作業でした。少しでも地図や資料（都市計画関係の）を救出したい一心でお願いし、カッタ君を動かして建物を壊しては止め、書類を拾い、また動かして拾うという気の遠くなつた作業でした。そしてすつかり広場になつたところに、ご近所の荷物を一旦出して、ご近所の解体が始まるこになつたのです。最初は小林のキャンプ用のテントをもつて来たり、例のブルーシートで覆つたりしましたが、以前から交流のあつた



私達は延々と書類を運び出しました。埃の中で耐えたゼロックスはその後3年間を故障もせずに支え続けました

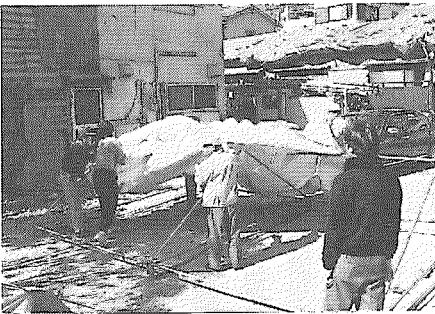


見事(?)に壊れた我が社

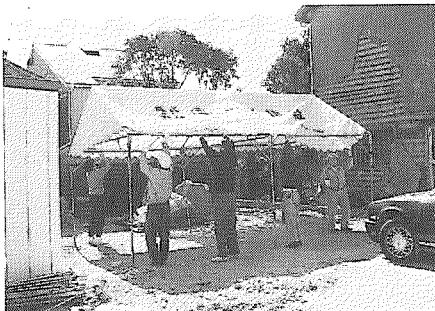


カッタ君は1週間働き通しで、跡地は広場になりました

出石町の『活かす会』の上坂卓雄さんに電話でお願いをしましたら、二月一日に会員の方々が揃って大きなテントをもつて見舞いがてらとおっしゃつて来てくださいました。『出石町』と『(株)川見建設』の真っ白な二張りのテントはその後長い間地域に貢献しました。翌年の冬、そのテントをお返しに出石に出掛けたのは震災後初めての小旅行になりました。出石町の皆様、本当にありがとうございました。



まずは広場に出石町のテントを張りました
(コー・プラン跡地)



○我が社とお隣の嘉村さんとの境目の生垣のこと

コー・プランは一九八六年設立時に楠丘町の一軒家を事務所としてお借りしました。私達の先輩でネットワークのメンバーでもあります武田則明さんのご友人が敷地内にRC造の住宅を新築され、古い木造の方を壊して駐車場にというのを新しい方の設計者の武田さんが「待つた! 借り手がおるぞ」と、昭和四年の建物は解体されずに出度く(?)我が社が借りることとなつたのです。始めは三年ほどという事だったとおもいますが、駅から不便ではあつたのですが、ご近所の方々が住んでもいいな私達を非常に可愛がつてくださり、よく面倒を見てくださいました。居心地がよく震災の時にはとうとう九年も経っていました。特に西隣りの嘉村さんのおじいちゃん(もう九〇歳ですが、お元気です)はこの地区的元自治会長さんで、もうお一人西田さん(残念ながら震災前に亡くなられました)という元副会長さんもよくしてくださいました。我が社の北庭にあつたビワが実るところ所員総出で実を取り、ご近所に配つたりしました。震災前、西隣とはブロック塀で仕切られ、南側のお家とは高さ一.



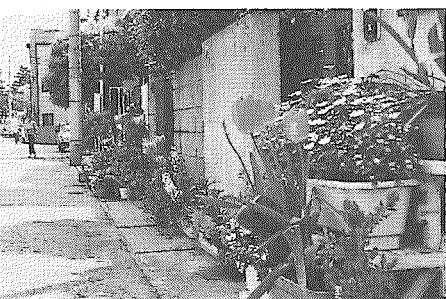
'86、開設当初のコー・プラン



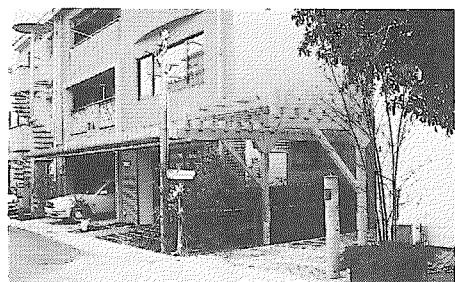
お隣の嘉村さんのおじいちゃんと小林、
生垣の完成時に



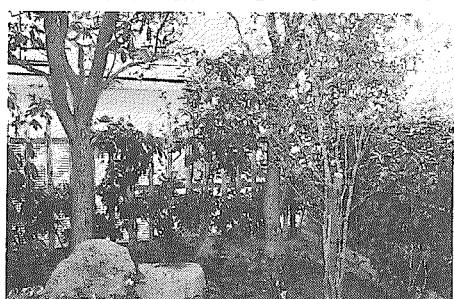
今や、きんもくせい通りは花の道



きんもくせい通りのプランター達



新築した我が社と嘉村さん宅のそろいのパーゴラ



茶店きんもくせいの南庭、塀がわりの杭

五メートル程の板塀でした。再建時大家さんの難色もありましたが、ブロックも板塀もやめました。南側は杭と植栽だけ、西の嘉村さんは両方からのダブル生垣です。再建はお隣の方が早かつたのですが、我が社が出来て植栽をする時(植捨組という造園屋さん)にダブル生垣にしてもらいました。ザザンカ、レッドロビン、きんもくせい、沈丁花の寄せ植えです。冬からザザンカが咲き、春には沈丁花が、秋にきんもくせい、と花が絶えずに楽しめます。この生垣がよかつたのか、嘉村さんはその後、北側の道に沿つても生垣にされました。この時は神戸市の生垣助成を活用しました。今この道(きんもくせい通り)は花や緑にあふれ道行く人を和ませています。

○壊れた家を解体せずに直せないかとはるばる来てください

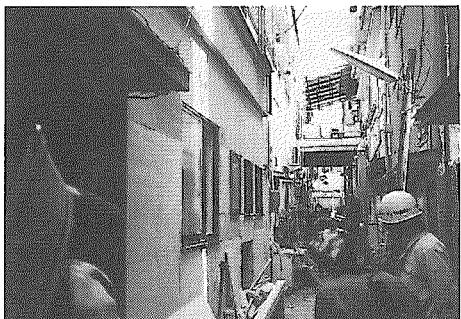
さつた三春の大工さん達のこと

二月一八日に建設省建築研究所（つくば市）の岩田司さん（神戸市久保町の生まれです）が電話をしてこられました。「大工さんはいらんか」「大工さんて、家を建てる大工さんですか」というと、「三月頃、被災地で修繕すれば住める家があれば、大工さんを集めて行きたいと言つてゐる人があるんやけど」。それは二月一〇日ころに「野田北部で住宅修繕をしてほしい人がたくさんいるが、大工さんがいない」という森崎輝行さんからのSOSでした。小林が旧知の福島県三春町の佐久間さんに電話したのでした。それがH.O.P.E.計画仲間の岩田さんを通じて返事がきたのでした。そして二月二六日曜日に三春町住宅研究会の橋本孝一さんと佐久間保一さんが鷹取の現地をまず事前にご覧になつて、本隊は三月一二日から一九日まで一五人くらい（だつたと思います）が、野田北部集会所や、宮本温泉（鷹取カトリック教会の西側に焼けず）に残つていたのですが、今はりません）というお風呂やさん（建物が壊れていなかつたので泊るだけでお風呂

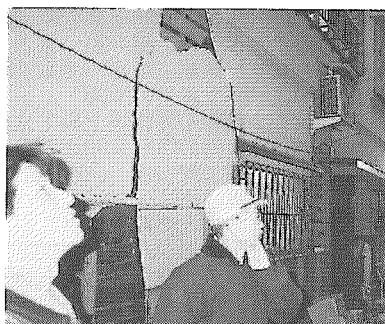
はありません。水も火もなかつたところです）に泊まられて、この地区の住める家の修繕をしてくださいました。

この時、地区は宿泊場所の確保や食事の世話をされましたが、実は隠れた応援者もありました。宮脇さんはJALの福島・伊丹間の往復航空運賃を半額にしてもらうのに一役かつてくださいました。もちろん岩田司さんも移動や交替の手配で奔走されました。

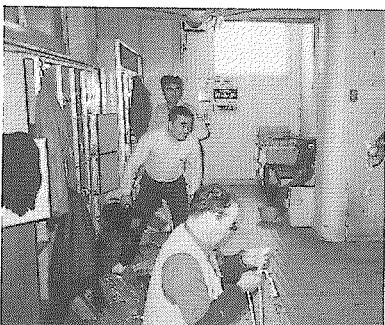
三月一二日、その日は雨でした。春とは名ばかりの肌寒い日でセーターの上に着てているコートも雨を含んで体の芯まで冷えきつたような日でしたが、大工さんを迎えてみんなで、まず修繕してもらうことになつて、まちづくり協議会副会長松田さんのお家を見学しました。私は「ほんまに直るんかなあ」と思つたことを今やから白状しますが、立派に直つて現在もちゃんとお住まいです。その後被災地ではたくさんの家が壊されて新築されましたが、ほとんどの家は修繕で直つたんやなあと今は確信しています。大工さんは偉い！



とりあえずインドネシア義援ペニアで修復中



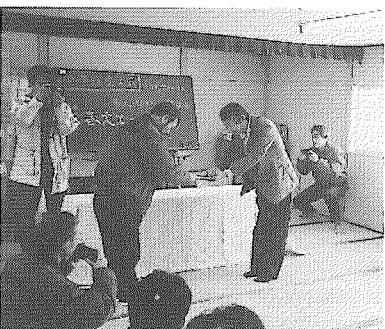
松田さんとそのお家。壁には大きなクラックが入っています



一日の仕事を終えて宮本温泉でほっとされる大工さん達



到着された日の歓迎会（上）と終了した時のお礼の会（右）。工事賃金は約束どおりお礼の会で手渡されました。そっくりそのまま義援金としてまちづくり協議会へ寄付されました



○青池憲司さんが撮り続けておられる野田北部のビデオ映画のこと

青池監督との出会いは野田北部の種蒔きの日でした。それより前に前述の朝日新聞の大和田建太郎さんから会うようにと言わっていましたが、わざわざ「私が天川です」と言って会うのも変だし、まあ縁があればと思つていましたが、そのうち縁があつたどころか、という関わりになりました。『人間のまち、野田北部・鷹取の人びと』の上映会は、できあがつてまず鷹取カトリック教会にて試写会があります。その次に『港まち神戸を愛する会』が上映会とシンポジウムを開き、青池さんは全国への上映営業(?)の旅に出られるという寸法です。記念すべき第一回上映会は九五年一月四日土曜日、なんと！旧居留地の朝日ホールだったのです。

青池さんの映画と石川栄耀という都市計画家が企画監修した関東大震災の復興計画の映像『二〇年後の東京』の2本立て。シンポジウムは早稲田大の佐藤滋さんにも来ていただきて『震災復興、市民の連帯をめざして』という題でした。あんなに大きなホールでの会場企画など

○震災後の神戸に修学旅行に来てくださいと『論壇』に書き、本当に震災見学修学旅行が今も続いていること

九五年七月一七日、朝日新聞『論壇』に投稿しました。震災で壊れてしまつた我が街を嘆くことより、全国の皆さん、神戸に来てください、神戸で食事をしたりホテルや有馬温泉に泊まつてくださる事も義務です、と訴えました。修学旅行に来てくださいと書きました。これを読んでくださった東京都立柏江高校の池辺一男先生が熱心に生徒達に話してくださいり、九六年二月に修学旅行がかないました。鷹取地区を見て、カトリック教会ペーパードームで野田北部まちづくり協議会の浅山会長や鷹取教会のシスター、是枝さんの話を聞き涙を流す女生徒も

ありました。

その後北野

地区へ移動し、神戸市教育委員会の佐藤さんとのご尽力で修復中の異人館を見学したり、住んでおられる異人館でお茶をいただいたりし、わずか一時で

論壇
小川、解説
天川 慶次



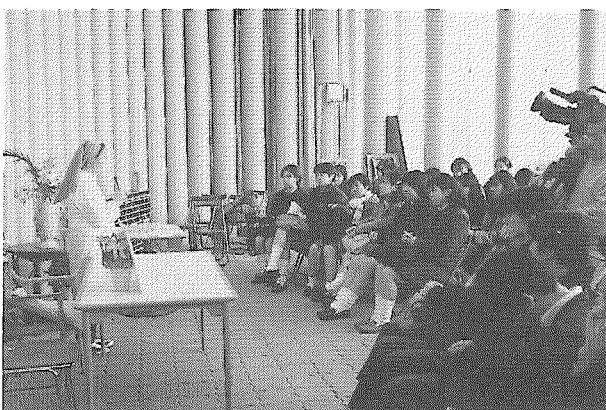
(出典：『朝日新聞』1995.7.17)

全く経験がなく、朝日ホールのスタッフにばかにされながら、私達の企画力でホールが一杯になるはずはなく手痛い結果となりました。懲りずに「最後の映画祭は朝日ホールにしようね」といつて青池さんに苦笑されていましたが（何を隠そう、無謀3はどこへ行つたのかと思われた方、これが天川無謀その3なのです）。

その後連続映画祭は『連帯せよ！復興市民』というタイトルで神戸市のまちづくり会館二階ホール（ビデオの解像度が極めて悪く、青池泣かせなのですが）で続けており、現在一三部までできあがりました。青池さんの予定では一五部までいくそうです。当時は遠大な計画やすがり、現在一三部までできあがりました。青池さんの予定では一五部までいくそうです。当時は遠大な計画やなあとと思いましたが、いよいよもうちょっとになりました。



第1回青池映画会の打ち合わせ。我が社C棟サロンにて



鷹取カトリック教会ペーパードームで柏江高校の生徒さん達に話をされる是枝シスター

現状を見ていただきました。その後も池辺先生は何度か神戸に来てくださいって、ボランティア活動もしてくださいました。生徒さん達は青池さんの映画にも登場しましたが、映画は彼らの卒業に間に合わず、残念でした。

その後の修学旅行は神戸市の観光課が受けてくださる

ようになり、「ガレキに花を」と同じく専門家の手に委ねられることになりました。

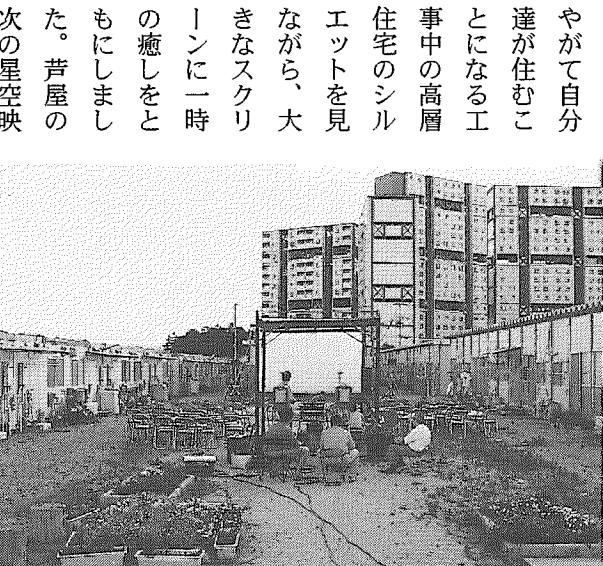
○仮設住宅での星空映画会のこと

芦屋の南の端に南芦屋浜という埋立地があります。そこに復興公営住宅ができることになり、大阪の江川直樹さんとこの住宅の住まいの方の仕事を一緒にすることになりました。『南芦屋浜コミュニティ&アート計画』は埋立地に建設される新しい環境を「自分達のまち」として居住者が積極的に関わっていけるきっかけ作りのワークショップでした。新しいコミュニティを作るために入居予定者とアーティストや建設スタッフ、芦屋市立美術博物館、住宅・都市整備公団をはじめとする事業実施チームすべてが領域を越えた共同作業によって行われました。いろいろなアートが作られましたが、人々が住み、初めてそれは完成するものとして捉えられています。

そのワークショップの二回目（九六年六月二九日）のオプションとして、芦屋浜に建ち並んだ仮設住宅の一角にスクリーンを張つて星空映画会をやりました。題目は

篠田正浩監督作品『瀬戸内ムーンライトセレナード』。震災のシーンから始まるこの映画は、同じ運命の船に乗り合わせた人々が、震災で仮設住宅という船に乗り合わせることになつた運命と重なりました。松竹のご尽力で本格的な映写機の廻る音を間近に聞き、潮の匂いの中で遙かに見える

達が住むことになる工事中の高層住宅のシルエットを見ながら、大きなスクリーンに一時もにしました。芦屋の次の星空映



芦屋シーサイドタウン高浜仮設の星空映画会。この場所は一棟の仮設住宅が火事で消失した跡地です。松竹直営プロ隊による本格上映会でした

ゴーフラレ 天川様・中井様

前略

今年の秋の大雪と寒波は例年にならぬか寒いものがあります。
國のからうどうど年が経りますが、神戸はいかがですか？去年のお正月には想像もつかなかったような花火で今年の年を过了かも大勢いらっしゃると思います。近くから帰郷を過ごして行く神戸の様子を知る私には、本当に何も言うこともできませんが、考えることが出来ます。

さて、先日12月に開催されました、北海道デザイン協議会の「デザインフェスタ」は大盛況のうちに終了しました。今度は、和田さんのオーリナル・グッズの他に、地元で活躍しているさまざまな分野のデザイナー（もちろんプロフェッショナルです）17人が、オリジナルシャツやチャーリーデザイン3枚づけで販売しましたが、そちらの方もなかなか良い出来で会場中で大盛り上がりました。そもそもから出でただけの腕っ張った在廊は、お世話場でもあった丸久屋センターラル（商品と文具の色々な品のうちの大好きなお店です）の好評で、展示コーナーを作つて販賣くださいってています。

デザイン協議会の会員（バーバー）では、まさに上り下りで会員からの寄付もいただきます。思ひもよらずいろいろと反響があり、デザイン協議会の会員でも面白い企画をどうもありがとうございます（北海道の人にはノリやすいのですが、地方の間に載つた記録を伺いますので読んでみてください）。

シャツの売り上げとその他のカンパはデザイン協議会の方から、まとめてそちらにおくられることが多いです。ほかにはデザイン協議会の田中さんから送迎がいくと思われます。それから、私が個人的にあまりこだわる上り下りにつきましては下流とは別途に振り込みます。それプラス、学校法人 北海道デザイン専門学校、銀部一同よりカンパがありましたが、手数料割約のためTシャツの売り上げと一緒に振り込みます。

伊藤千織さんからの手紙
1996.1.7

伊藤千織さんからの手紙

映画会は鷹取の広大な空地の予定でしたが、台風で流れました。本当は青池さんの「他の映画はいいやじや」との思いが台風を呼んだとの説もありますが、

その次が、長田区の菅原市場の駐車場でした。あの寅さんゆかりの地での映画会でした。そしてその後随分後になりますが、九八年一〇月兵庫区の新川運河で第一回世界運河祭の中での星空映画会（この時は寅さんの最後の映画、『紅の花』でした）が最後です。これらの三回の星空映画会をやってみてお金もかかりましたが、「いやあ映画つて本当にいいですね」という感想です。



(出典：『北海道新聞』1995.12.20 夕刊)

そして、震災直後から発行を続けた二ユーズレター『きんもくせい』や、きんもくせい以外のまちづくり二ユースなども集めた『復興市民まちづくり1～8巻』をボランティアで出版してくださった学芸出版社の京極さんや前田さんをはじめとする社員の方々へのお礼、ガレキTシャツなどグッズの販売にご協力くださった全国の方々（札幌の伊藤千織さんはじめ北海道デザイン協議会の皆様、水谷ゼミ二期生で富山の中川陽子さんやそのお友達、

その後お元気でしょうか）、数えればきりがなく、語り尽くせない歯痒さと非礼が残りますが、私の心の中で、たくさんのお花が咲き、その時その時に色を添えてくれました。

私達ネットワークは専門家の集まりですが、震災直後の連絡も不自由な時から、誰かが誰かに命令する訳ではなくて、それぞれ個人が責任をもつて市民まちづくり支援をおこなつてきました。ほとんどが建築や都市計画の専門家ですが、私はその専門家人達と二〇年以上一緒に仕事をしてきたというだけの言わば素人－アマチュア一です。

アマチュアという言葉はフランス語です。日本語では「あることに経験のない、専門的でない人」とか「職業としてではなくそのことを行う人」（岩波国語辞典より）という意味で少し馬鹿にしたような雰囲気がありますが、フランス語のもともとの意味は「ある物事を仕事ではなく、純粋に無償に愛する人」というような意味だそうです。これは四方田犬彦さん（前に書いた四方田さんの従兄弟）がご自身の本のなかに書いておられます。

「ガレキに花を」の活動は全く手探りで、何も目標・結論をもたずに始まりました。大きな声を張り上げる訳ではなく、黙々と自分の信じた思いを『花』に託して歩き始めたという感じでした。素人考えのために専門家の方々を驚かせ、困らせての活動だったと反省もしています。でもフランス語の意味のままに、「仕事ではなく純粋に無償で」やつてきました。そしてそれらの一つ一つが今私のかけがえのない宝物となりました。「まちづくりはおもしろい」とおっしゃる専門家や先輩達のちょっとだけ仲間入りかなと思つたりもしています。

これを読んでくださった人達に何かヒントになることが、『ガレキに花を咲かせましょう』の中に一つでもあります。

あとがき

出勤や通学の途上、歩く道端の荒れ地や電車沿いの土手に「ひそかに花の種をまいて突然花畠になつたら」とあなたは思つたことはありませんか？

たぶん、一度はそうした「夢」とまではおおげさでなくとも、ひそやかな想いを持つたことのある人はたくさんいると思います。想うだけの人達は無数にいます。

想うだけでは始まりません。「想い」がなければ始まる始まらないもありますが、しかし「想い」を「実行する」人はほんのわずかです。そのひとりが筆者の天川佳美さんです。

この震災からの復旧復興の原点は「ガレキに花を」だ！と叫んで始めた活動ではなかつたし、今でも肩ひじ張つて行政を面罵し、仲間を叱咤し、シャカリキになつてやつている活動ではありません。

一月の震災から、ようやくなんとか落ち着きをみせはじめた三ヶ月後の一九九五年四月半ば、『穏やかで汗ばむような春のよそよい』のある日、ふと気づいた「ガレキ」の中の花鉢や植木達に、もう一度命がよみがえりますように、それを子供、年寄り誰もが微笑みながら耕し、水をやることが、震災からの復興であり「市民まちづくり」の原点やないか、というのがその心です。

誰もが思いつき、誰にでもできる「ここぞ、誰にもできない」とがたくさんあ

天川佳美（あまかわ よしみ）

1950年8月10日生。1974～1986年（株）都市・計画・設計研究所を経て、1986年より（株）コー
ー・プラン。

・参加・活動団体等

港まち神戸を愛する会、共同研究1930年阪神間世界、甲斐文化研究会、ユイの会、
日本ナショナルトラスト会員、兵庫県「緑の総量確保推進委員会」委員のほか、阪神
大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク事務局、ランドスケープ復興支援会議
(阪神グリーンネット)、HAR(ハル)基金現地事務局を運営。コレクティブハウジ
ング事業推進応援団として被災地における復興公営住宅にコレクティブハウジング
を取り入れるための推進活動を行なうとともに、入居後の住まい方の支援中。

市民まちづくりブックレット④

ガレキに花を咲かせましょう

1999年11月15日 第1版第1刷発行

著 者 …… 天川佳美

発 行 …… 阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク
神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり（株）コー・プラン内
電話 078-842-2311 FAX 078-842-2203 〒657-0024

編集協力 …… (株)学芸出版社

(制作：中木保代、扉デザイン：三原尚子)

表 著 …… 上野かおる

印 刷 …… 創栄図書印刷

©天川佳美

Printed in Japan

市民まちづくりブックレットのお問い合わせは、阪神大震災復興市民まちづくり支援
ネットワーク（電話：078-842-2311、FAX：078-842-2203、E-mail：mican@ca
mbn.or.jp）まで。

ります。夢といつてもいい「希望」を形あるものにするためには、一步を踏み出
す「勇気」が必要です。あのチャップリンはライムライトの中でそれに加えて「少
しのお金」があれば、人生においてできることはない、つぶやいています。
人のやさしさ、人を想うやさしさがこの震災でみつけた、もつとも大切な宝物
だったと思います。その一番わかりやすい取り組みが「ガレキに花を咲かせまし
ょう」だったのではないでしようか。
その「希望」のための「勇気」が、この「ガレキに花を」という活動（という
よりも、被災した多くの普通の人々への「まなざし」だったのかもしれません）
の本当の意味するところであり、被災しうちひしがれた市民へのメッセージであ
つたと思います。
それこそが「市民まちづくり」の最も基本的な立脚点だと思います。

一九九九年九月二九日

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人 小林郁雄

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

阪神大震災からの復興において、市民まちづくりを支援する専門家のネットワークです。

震災前から何らかのかたちでかかわりのあった被災地を自らの手で復興させたいという思いを持つ、まちづくりプランナー、建築家、大学研究者等が集まり、震災後 10 日目に結成しました。誰かが誰かに命令する訳ではなく、参加メンバーはそれぞれが責任を持って担当区域を受け持ち、専門的立場からさまざまな支援活動を行い、行政の参加も得て、復興市民まちづくりの共通課題に協同して取り組みを進めています。

- 1996 年に第 5 回兵庫県さわやか街づくり賞、第 10・11 回神戸市景観ポイント賞特別賞受賞
- 1999 年に第一回関西まちづくり賞、建築士会連合会業績賞受賞。

既刊ブックレット

市民まちづくりブックレット No.1

「神戸東部」まちづくり文化のルーツ (品切)

1998 年 7 月 25 日に神戸東部市民まちづくり支援ネットワークの主催で開催された「まちづくりフォーラム」の記録。阪神間地域のまちづくり文化のルーツとして、「だんじり、酒蔵、生活協同組合、大学」の 4 つのテーマをあげ、それら各専門家の報告と河内厚郎さんの総括コメントなどを収録しています。

市民まちづくりブックレット No.2

震災復興まちづくり「本音を語る」

1999 年 1 月 17 日深夜 0 時からあの時刻 -5 時 46 分まで震災復興にかかわってきた人々（まちづくり協議会関係者、マスコミ、ボランティア、学者、学生、行政、コンサルタントなど）が、震災から半年間の動きに限定して、それぞれの本音を語った 5 時間の全記録です。

市民まちづくりブックレット No.3

次代につなぐ都市の記憶「震災をこえて」

シンポジウム「都市の記憶」は、第 1 回が 1996 年 11 月 9 日“未来の神戸の歴史をつくるために”、第 2 回が 1997 年 11 月 29 日“次代へ何を引き継ぐのか”、第 3 回が 1998 年 11 月 14 日“人とまちとが共有するもの”を都市の記憶実行委員会主催で開催しました。

震災後の復興で愛すべき神戸の風景が大きく変わっていく中で、神戸らしさを持続する復興のかたちとはどのようなものかを検証しています。

定価(本体1000円+税)

市民
まちづくり
ブックレット

No. 4

